

【コメンテーター】 パネルディスカッション「日本および日本人—外からのまなざし」
第101回日文研フォーラム 国際日本文化研究センター 1997年11月11日

第101回 日文研フォーラム



パネルディスカッション

日本および日本人—外からのまなざし



国際日本文化研究センター

日文研フォーラムは、国際日本文化研究センターの創設にあたり、一九八七年に開設された事業の一つであります。その主な目的は海外の日本研究者と日本の研究者との交流を促進することにあります。

研究という人間の営みは、フォーマルな活動のみで成り立っているわけではなく、たまたま顔を出した会や、お茶を飲みながらの議論や情報交換などが貴重な契機になることがしばしばあります。このフォーラムはそのような契機を生み出すことを願い、様々な研究者が自由なテーマで話が出来るように、文字どおりインフォーマルな「広場」を提供しようとするものです。

このフォーラムの報告書の公刊を機として、皆様の日文研フォーラムへのご理解が深まりますことを祈念いたしております。

国際日本文化研究センター

所長 河合 隼雄

● パネルディスカッション ●

「日本および日本人—外からのまなざし」

● 発表者 ●

金 禹昌

Kim Uchang

(高麗大学校文科大学 教授・韓国)

リヴィア モネ

Livia Monnet

(モントリオール大学 準教授・スイス)

カール モスク

Carl Mosk

(ヴィクトリア大学 教授・アメリカ)

ヤン シコラ

Jan Sykora

(カレル大学 助教授・チェコ)

鶴田 欣也

Kinya Tsuruta

(ブリティッシュコロンビア大学 教授・カナダ)

コーディネータ：井上章一 助教授

コメンテーター：稲賀繁美 助教授

司 会：千田 稔 教授



1997年11月11日(火)

○司会：千田 稔教授

ようこそお越し頂きました。秋も深まって参りましたが、今日、第一〇一回の日文研フォーラムを開くことになりましたが、実は、国際日本文化研究センターが開設されて以来、大体月に一回ずつ日文研フォーラムというものを続けて参りましたが、先月でちょうど一〇〇回を迎えました。で、今日一〇一回記念のフォーラムを開きたいということで、会場を日文研に移して行うことに致しました。いままですと京都の市内にございます国際交流基金の施設を利用して頂いていたわけですが、今回、記念ということで、どういうことをやろうかということ、我々、色々と相談したわけですが、日文研にお見えになっていらっしゃる外、国からの客員の先生方をパネラーとしてパネルディスカッションを開こうじゃないか、ということ、今日、『日本及び日本人―外からのまなざし』という、こういうテーマで先生方から忌憚のないご意見を頂こうということになりました。どうぞだいたい四時頃まででございますが、お楽しみ頂きたいと思っております。

時間もあまりございませんので、さっそく始めたいと思っておりますが、最初に私から今日のパネリストの先生方或いは、日文研のコーディネーター・コメンテーターをやって頂く先生方をご紹介したいと思います。まず、パネリストの先生からご

紹介したいとおもいますので、先生方順番に上にお上り頂きたいと思えます。高麗大学校文科大学教授の金禹昌先生です、どうぞ。続きましてモントリオール大学準教授のリヴィア・モネ先生です、どうぞ。続きましてヴィクトリア大学教授のカール・モスク先生です。続きましてカレル大学助教授のヤン・シコラ先生です。続きましてブリティッシュコロンビア大学教授の鶴田欣也先生です。宜しく。

今日のパネルディスカッションのコーディネーターを勤めて頂きます国際日本文化研究センター助教授の井上先生です。それから今日のコメントーターをやって頂きます国際日本文化研究センター助教授の稲賀先生です。以上ご紹介させて頂きました先生方によってこれからパネルディスカッションが行われますが、どのような結末になるか私すら予想できないのでありますが、その結末を皆さんと一緒に楽しみたいと思います、じゃ井上先生、どうぞ宜しく願います。



○井上章一助教授

では、いまから四時頃までおつきあい下さいませ。外からのまなざしということなのですが、まず、自分のことを話さして頂きます。若い頃に宮方の霊柩車の研究ということをやったことがありました。和風のお御輿になっている霊柩車です。なぜそんなことを始めたかといいますと、留学生の方からあれは一体何だというふう尋ねられた時に、ああ外国の方にはこれは珍しいんだな、それで気になって聞くと、あんな車世界中で見た事がないというふうに言わはる方が多くて、それでは世界に類例を見ないあの自動車は誰がどんなふうにして考えたのかというのが日本文化論になると思った事がありました。外からのまなざしが研究の材料になったというのが私の実感です。今日もなんかそんなヒントが沢山転がっているんじゃないかと期待しております。私の長話はこころ辺でよします。それぞれの方に手短に日本について、私達が多分気がつかないようなことを色々報告頂けると思います。先ず金先生からお願いします。有難うございました。



★金 禹昌 先生

私はこんなに公の場所で日本語で話すのはこれが初めてでどうも恐れ入ります。日本語がどうも下手でこれではどうか私の話す事が理解出来るかちょっと恐れ入りますが、我慢して下さるようお願いいたします。

アメリカの日本文学者でトーマス・ライマーという人がおりますが、彼が日本語を知る方法についてあるビジネスマンの話を引用してこう言っているところがあります。日本のビジネスの働きを知りたいのなら、企業運営の秘訣に対するいろいろな本を読むよりは、むしろ俳句や、現代小説や、源氏物語を読むのが良い。そんなことを言っています。さあ、そうでしょうかね。なんかの国に一番多くのことを教えてくれるのは、私の考えでは、経済指標じゃないかと思えます。私の体験では私の国、韓国と同じ経済的水準を持っている国は、その生活の質においてほぼ韓国と同じではないかという経験をしました。多くの社会学者は日本がナン

パーワンと言っていますが、これは日本に対する最も重要な事実であります。

社会学者、科学者でなく人文学者は何を知ることが出来ましようか。彼らは観光客のようにただ、目と耳を持っているだけです。さあ、何を知ることが出来ましようかね。昔のフランスにフォントネルという人がおりますが、その人は目に見えるのを疑い始めるのが科学の始めと言いました。それで観光客が目で見えるのを、それをそのまま受け取っていいかどうか知りませんが、日本でもっとも目立つのは、日本が綺麗で美しい国ということ。随分前のことですが日本語を勉強する韓国の学生らの修学旅行の面倒を見ていた私の大学のある教授に、学生らが日本で持って帰る印象はどんなものですかと聞いたことがあります。彼の答えは簡単です。それは、親切・清潔・正直の三つのことだと言っていました。この学生らが受けていた反日教育を考えてみれば、これは驚くべき答えだと思います。旅人は幼児と同じですから地元の人の親切な案内、衛生的な環境、正直な情報と商品の取引。こんなものが必要です。これは今は随分と違って来ましたが、昔は道行く人に、旅人に対する人情の厚さが最も重要であったと言えましよう。また、人間は皆旅をする人たち、フランスの哲学者マルセルの言葉でホモピワートルですから、これは不変的な人間意識そんなものにも関わっていると思いま

す。親切と正直は道德の問題であるし、社会秩序の問題であります。日本は秩序がある社会です。

これが日本の特徴でないかと思いますが、それはこの秩序がかくばった形でなく優しい形で実施されていることではないかと思っております。それで、礼儀とマナーが最も大事なことになります。丁寧な礼儀が日本人との関係を調整する基本的なメカニズムになっているのではないかと思っております。礼儀正しい社会は気持ちよい社会ですが、でも礼儀は社会を狭苦しくする所も有ると思えます。最近私はアメリカの哲学者フィンガレットという人がハンドシェイキングについて何か書いたのを読んだことがあります、これは極めて単純な日常的な事ながら、バレエのパ・デイ・ドゥ、二人で踊る踊りのようにどうも細かい感覚を必要とするものであると彼は言っています。例えば、二人の手が同時に前に出てこなければなりませんから、それは絶妙なタイミングが必要です。礼儀の外面的表現としてのマナーは、地元の人には自然的でも、よその人には学びにくいものです。この礼儀がどの社会でも重要ですが、この日本では最も重要なものではないかと考えます。ついにながら日本人は例えば韓国人に比べて、余り握手をしない人たちのようですね。礼儀は自然で美しい物ですが、それなりの規律と緊張を伴

うものです。

その優しい真ん中に何か秩序と規律が隠れている。そんなものと思います。礼儀が秩序の一部というのは日本の綺麗な所でも見えますが、汚い所でもっとはつきりするのではないかと思います。大阪関西空港から京都に来るには、大阪周辺の都市地帯を通じて来なければなりません。そこには汚いとか話が出来ないそんな家がありますね。これが先進国の日本としてはちょっとふさわしくないと思えるところです。この狭い、汚いと思える、そんな家は先進国の腐敗した都心というよりは、第三世界のスラムの様な印象を与えるのですが、注意して見たらこの狭い家も狭い通りもみんな真っ直ぐに揃っているのを見いだす事が出来ません。町の中に入ってみたら確かに丁寧な生活が営まれていると思います。狭いところ大勢の人が群がる場所こそ、秩序が必要で礼儀が必要であるんじゃないかと思えます。

自分の境界をよく知って、他人の領分を侵さないこと、これが狭いところで一番大事だと思います。礼儀はこの狭いところの生き方のメカニズムでありながら、これを美しいものにアウフヘベン、ドイツ語で言ってアウフヘベンしたそんなものじゃないかと思っています。日本では大体自分の領分を守るのが重要に思われ

ます。日本人が西洋からいろんなものを取り入れながらも、握手をしないのは、こんなものに繋がっているんじゃないかと思えます。個人と個人の距離を保つのが重要であるのですから、また、官僚の縄張り、建物と建物の二重の壁、家があつてまた家がある。それを一つにして、壁を一つにしたらいいと思うこともできませんが、これが二つの家があつて、その壁が二つあるというそんなもの、町の境界のはっきりしているもの、その全て、区分がよく保たれている。そんな印象です。自然の景観も、窓を通して見るような額縁に入っているのが一番好まれているのじゃないかと思えます。日本の庭園もそこに入っていくよりは外で見るのが、自分の領分を守って自然を外で見るのが好まれているのを表しているのではないかという思いがします。

自分の領分を守るといえば他人の邪魔をしないと同時に自分を守るということなのですが、日本の自我意識が強いということではありません。西洋人の自我、私というのは、内から外に向いて行くエネルギーのようですが、日本人の自我は領分、自分が守っている領分と一致するように見えます、領分そのものが自我を構成する、そんな印象ですね。

京都駅から日文研まで来るには地下鉄や阪急の電車、市バスという色々な交通

手段に乗り換える必要がありますが、これが会社や自治団地のちゃんと守られている境界を渡って来ることと思います。私が日文研に着いたのは午後遅くになった時でしたが、日文研の奥野さんが親切にお待ち下さって、無事に宿舎に入ることになりました。もちろん、その宿舎に入る前には鍵を貰って入居書類に署名しました。この書類は私がこの日文研の宿舎入居のことについてやり取りをした書類の三番目の書類でした。みんながちゃんと整ってよく行われていることの証拠じゃないかと思えます。これがみんな礼儀正しい中に何か厳格な規律があるということになります。ですから、また繰り返しおっしゃって、これが厳しく行われているのではなくて、丁寧な礼儀の形で実現されている、それでそんなものが、全てが、舞踏の様に美的形式、美しさの形式の演出のように見えるのです。

これが、よその人には規則があんまりはっきりしていないのが、日本は謎だという印象を与えるかもしれません。西洋人が日本に対して書いている本でエニグマという単語をタイトルに持っている本がありますが、西洋特にアメリカという規則がはっきりしている国の人には、日本はちょっと謎のように見えるかもしれません。アメリカが何かのはっきりした機械、それをどう使うかの手引きがはっきりしている機械といったら、日本は芸術品のようでこれを規則では捉えるこ

とが難しいし、感覚、美的感性を通じて捉えなければならぬ、そんなものじゃないかと思えます。また、これはそんな訓練、そんな感性を持っていない人には理解することが難しいことになるし、また日本の側では、そんな感性を持っていない人を仲間に入れたら困ることがたくさんできる、そんな恐れを持っている社会ではないか、これをちょっと批判的にいったら外からも内部からも、批判の取っ手を探し出すことが難しいことになる、そんなことを思いました。これは、度々私はあそこにお座りになっていらっしゃる鶴田さんと日本論の中でお話しした事があります。では、これで失礼致します。

○井上 どうもありがとうございました。あの、金さん一つだけ、韓国の人は比較的頻繁に握手をするのですか。

★金 頻繁じゃなくて、いつもです。

○井上 ああ、いつもですか。いや、意外なことを教えて頂きました。じゃ時間が無いので、次にモネ先生よろしくお願いたします。



★リヴィア・モネ 先生

ありがとうございます。モントリオール大学のリヴィア・モネと申します。よろしく願います。あまり時間が無いので、幾つかの点を提出させて頂きます。

このパネルディスカッション・シンポジウムのタイトルを見たら、驚いたというか、呆れたというか、また外からのまなざしというか、外ではなく内に居るのに、この研究所の所長をやっていたらっしゃる河合隼雄先生の講演をあまりにも満員で外でテレビを見るのなら、また外も分かるんですけれども、やっぱり居るのにも関わらず、また外からという事なんですけれども、しかしそれはたいへんおもしろくて、結局いつまでもそういう事なんですけれども、しかしそれはたいへんお風に見られるかということに、相変わらずたいへん驚きました。別に或いは世界の中の日本とか、日本の中の世界とか、すこしずつそういう区別がなくなりつつある時代が来ている訳ですから、別にそういう話題にそんなに、もちろん日本も

注目されている訳ですけれども、しかし国際文化的なあらゆる意味、私の今の映画の研究なんですけれども、今日の話の話題というのはアニメの話をしように思っているんですけども、しかしどっちかというとなまざし、視線というものを研究しておりますから、おもしろいなと思って、やっぱりそういう好奇心が未だにあるのかなということで、前置きにさせて頂きました。

つまりそういうまなざしというのは、我々日本研究者は、どっちかという日本文化の研究している訳ですから、そういう日本人と日本文化にあるまなざし、視線をどっちかというの内面化している訳ですから、そういう我々と話している日本の皆さんは、結局鏡の自分の映し図とある意味では、話していらっしやるんではないかというような気がしてならない、ということがあるのではないかと思うんです。そういうタイトルを見ると、しかしなかなかおもしろいかと、なぜ今更にああいう好奇心があるかというむしろ皆さんに聞きたい程でございます。で、ちょっとまなざしとか視線の話をしようと思っっているんですけども、映画というよりも、もっと具体的に言えばアニメですけれども、この会場に集まっいらっしやる多くの皆さんが、既に見ていらっしやるもの、のけ姫という大ヒットなんですけれども、そういうアニメの映画、宮崎駿監督、大スターなんですけれ

ども、そういう映画を見る時の日本の皆さんのまなざしと、外国のそういう映画を見るときの外国の観客のまなざし、それから映画の中の視線はどうなっているかということをやっと注目しておきたいと思って今日来た訳ですけれども、しかし先程も言ったようにそういう外国人を映画、アニメ映画でなくともいいんですけれども、日本文化を見る時にやっぱり日本人のまなざし、視線も既に内面化しているということもやっぱり前提にあるんじゃないかと思うわけです。ですからあなたは日本をどう思うんですかという時にやっぱりある意味ではその日本文化、日本人のまなざしを内面化したものとして見ているのですから、そういう内面化したまなざし、視線が既に前提にある訳です。例えば宮崎駿の大ヒットになっているこの九月に百万人目の観客を突破したとかいう情報が入っている訳ですけれども、非常に大ヒットになっていっている、そういうアニメの映画を日本人の観客と外国人の観客がその映画を見る時に何か文化的差異があるかどうかということを考えておきたいんですけれども、なぜかという結局ちょっと調べてみたら、どうも九〇年代に入ってから日本のアニメ映画というのは、外国でものごくブームになっていって、ジャパニメーションという文化現象さえ起こっている訳です。しかもどうもそういう文化現象を最初に起こしたのはイタリアみたいで

すけれども、フランスでは例えば一九九三年にアネシー（フランス）で、日本じゃなくてアニメーションの国際映画祭があって、宮崎駿も特集があってどうもそのアニメ映画の監督の映画作品が上映されていて大ヒットになって非常に人気があったということもある訳ですけれども、つまり観客のまなざし、なぜかという和日本でそのアニメを見ながら育ったオタクの世代が居る訳ですよね、そういう世代はますます外国でも見られつつある訳です。しかもそのオタクという言葉もフランスやらイタリアやら、あるいはアメリカで見られるようになりつつある訳です。

ですから例えば、宮崎駿の「もののけ姫」は今たいへん人気を集めている、そのもののけ姫を見る時の日本のオタクの青年達を見る時と外国のフランスでそういう映画を見る時のまなざしと、どういう風に違っているか、でやっぱそのフランスのもののけ姫は未だに上映されていないんですけれども、例えばその前の映画、宮崎駿の「風の谷のナウシカ」とか「となりのトトロ」とかあるいは「天空の城ラピュタ」とか、という様な映画は既に上映されていて、そういうフランスのいわゆるオタクの若者達はそれを見る時に、日本のオタクと似たようなまなざしを持っているのではないかという事なんですけれども、そういう点を皆さん

はどう思っているかというのを、むしろこちらは聞きたい訳です。そのアニメの映画を見る時のまなざしを創っている文化装置は何なんであるかということをやっぱり考えて行きたいと思うんです。しかも今までの、今までというか五〇年代、六〇年代の日本の社会それから、ヨーロッパの先進国、あるいはアメリカの社会、そういう社会や文化、先進国、日本を含めてのそういう先進国の文化を創っている構築している言説や文化装置みたいなものが様々ある訳ですけれども、その中でもやっぱり映画装置のまなざしというのが自然というのか、たいへん大きな役割を果たしているのではないかと思っています。つまり日本人も含めて我々はある意味では五〇年代、六〇年代までは、映画的主体、映画装置によって創られていた主体、個人になっていたのではかということがあった訳ですけれども、しかし七〇年代に入ってからもっと、八〇年代になっていって、そのアニメ漫画、そういう文化現象にあるまなざしや視線にますます創られている主体や例えばオタクと自分で名乗っている若者達、そういうまなざしに創られている主体はどうなっているか、しかもそういう現象は先程言った様に国際的な拡がりを示している訳ですから、つまりそういう時に外からのまなざしというのが無くなっているのではないかということを考えておきたいと思えます。つまり

そういうフランス、イタリア、アメリカとかのアニメを見る人々は特にある世代、例えば一〇代から二〇代からのアニメを見る若者達は、日本のいわゆるオタクという世代と同じ様なまなざし、同じ様な視線を持っているのではないかということとが有るのではないかと思えます。もちろん具体的にそれを今分析していく時間が無い訳ですけれども、むしろその話を後の方に移らせて頂きたいと思えますけれども、しかしそういうまなざしをたえアニメ漫画をオタクの主体があるというのがまず認識しなければいけないということが前提にあるのではないかと思えます。

もちろんそのオタク現象によって作られた主体や、そのまなざし、アイデンティティー、ジェンダーパフォーマンスなどを批判的に見る必要があると思えますが…、しかもそれは日本だけではなくフランス、イタリアのそういうオタクの文化、アニメ映画や漫画の文化を知っているあるいは小さい頃からそれを見ながら育ってきた若者達は同じまなざしを、非常に似た様なまなざしを持っているのではないかと、ですから、そういう外からのまなざしを非常にまなざし、視線を共通している世代が出てきている時代になっていてのではないかと、ということを私は仮説として提出したいと思えます。で、しかもその、そう言う映画の中のまなざし

として例えば登場人物、その宮崎駿の「風の谷のナウシカ」とか、或いは、今非常に流行っている「もののけ姫」、例えば二人の女性組があるわけですよ。例えばもののけ姫の中では、タタラ場の「エボシ御前」、とそれに敵対している「サン」という少女なんですけれども、そういう女性の二人の組、つまり、自然を代弁している少女や、その自然をテクノロジー、技術を使って支配しよう、克服しようという女性、そういう組は、二人の組は、で、しかも二人の少女、或いは、女性をまなざしを交わしているわけです。何故そういうパターンになっているか、その登場映画の、アニメの映画の中の、そういう女性のまなざしは、何を、どんな文装装置を作ったか。外国でみるそういう二人の女性のまなざし、まさに女性的なまなざしと云えるかどうか。という問いが自然にその映画を見る時に、少なくとも私のような観客の中で出ているということをおきたいと思えます。例えば、自然を代弁している少女、先ほどのもののけ姫を見ると、狼に育てられたサンという野生的な少女と、それからそのいわゆる文明、技術文明、産業文明を代弁している、代表している女性、エボシ御前みたいな、そういう二人の女性の組の対立、それを何を代表しているか、何を象徴しているかということ非常に象徴的な話題ではないかと思えます。しかも例えば日本の観客、オタク

の世代、が確かに文化現象として、社会現象としてあるわけですから、そういう若者達はそういう青年達は、少女、少年達は映画や、先ほどいったその二人の女性の対立を見ている時のまなざしがどうなっているか、しかも外国でそういう映画を見る時のオタク世代のまなざしがどのようになっているか。ということをやったり考えるときに非常に象徴的な話題が出てくるのではないかという仮説として出していつて終わらせて頂きます。

○井上 有難うございます。僕も五年前フランスで偶然知り合った男の子と、マジンガーZの話で盛り上がった経験があります。おっしゃること、凄く良く分かります。続いてモスク先生宜しくお願いします。



★カール・モスク 先生

私は経済学者ですから、あのアメリカ人の経済学者ですから、日本の経済に関する話をちょっとしたいのですけど、私の課題は日本の温情主義的経済あるいは

信賴社会の經濟とか、そういう課題に関するお話をちょっとします。というアメリカ人の經濟学者は日本の經濟を見ると色々な特徴があるかも知れませんが、やっぱり一番大事な点は日本での契約はあんまり細かくなって、割合、人間的な關係が強いという意識があるという課題がありますね。アメリカでは例えば、西洋人は割合ドライで法律は第一だし、弁護士は多いし、契約は割合詳しいし、ですけど日本の場合には、柔軟性があるし、例えば労働者とか企業の相手とか色々関連会社の相手とか割合柔軟性が強いですから。そういう課題は米国ではすごく関心がある事ですね。ですから私はちょっと実例を挙げるつもりです。その後では将来の事に関する話をちょっとします。

例えばアメリカの場合には、一九世紀には色々な国から移民が集まっていますね。それから言語は勿論英語ですけど、色々な言語もあって、ですから法律は割合大事ですし、ということですね。日本は違って外国から移民は殆ど少ないし、ですから意識は法律的な考えが割合弱いと思います。それよりも日本の場合には、例えば部落とか農民のところでは勿論生産単位は家族、あるいは世帯ですけど、部落の場合には例えば田んぼの部落の場合には、一緒に働くケースが多いですね。例えば、収穫の時に一緒に皆様一緒に頑張るといふ主観はずっと前からありまし

たね、ですから日本と違って米国の場合、農民を見ると本当に個人主義だというよりも自分のファームで生産する意識が強いですけど、日本の場合には部落民は一緒に働く意識が強いということが大事な点ですね。その後では例えば同族とか、本家分家のことを見るとやっぱり地元の感じは強いですね。日本の部落民には、ですから、ああいう場合には、人間関係はすごく大事という意識が出たと思えます。そういう特に米の場合には、例えば水の管理とか、収穫をする時には一緒にやらなくちゃという、田んぼは小さいですからしかたないです。そういうことでね、それからそればかりではなくて、例えば、徳川時代の商人を見ると例えば「丁稚」「手代」「番頭」の終身制度が在りましたね。大阪ですけど。そういう制度を見るとやっぱり若い人、例えば十二才とか十三才ぐらいの若者を採用して人間資本の開発をしますね。会社の中ですから、米国から見ればこれは企業内の市場だという説がありますね。日本の場合には企業内の市場はものすごく大事ですから、生え抜きとか、自分たちの労働者の技術を高める企業内意識は強いということですね。ですからもうちょっと最近のところにくくと、例えば大正時代にみると大企業、或いは財閥をみると社員、雇員という区別がありますね。社員の場合には年功序列制度とか終身雇用制度みたいなシステムが出来ていましたね。です

から家族主義的な賃金だし、どちらかという契約はあんまりはっきりと分らないし、もっと昇進する時にはやっぱり頑張らなくてはとか、努力とか努力しないと昇進が出来ないとか、温情主義的な *mentality* とか意識は強いですから、そういうテーマは例えば米国の場合には、個人主義的な国であちこち企業を辞めて他の企業にいく人も多いところで、そういう意識は全然ないのでですから、あの点がやっぱり日本では本当に人間関係は大事だというテーマは米国の経済学者の関心がありますね。それからこの柔軟性は例えば、高度成長時代の後、企業の年齢構造をみると段々と若者は少なくなっていて、年をとる人とか、中年齢の人が増える時期には終身雇用制度とか、年功序列制度は段々と終わって職能資格制度というのが採用されたのですけど、この職能資格制度をみると新しい変化をみると内容はそんなに変わらないと思います。というところまだ人間関係は大事だとか、温情主義的な意識は大事だという、契約はあんまりはっきりと書いていないという伝統をまだ進んでいますね。ですからこういう柔軟性はすごいと思いますよ。色々な時期でも、例えば高度成長時代でも、今でも進んでいるシステムはまだこれはやっぱり根は強いと思います。ですけど将来にはどうでしょうねという考えが出来ると思いますね。例えば高齢化の問題があるし、国際化の問題があるし、自動化の

問題があるとか色々な変化が将来には起こると思いますね。ですからそういう温情主義的な経済は崩壊するか崩壊しないとか、そういう議論が出来ると思いますね。私自身の意見は国際化の影響は段々と拡大したら、例えば日本の企業は外国で生産するとか、日本で外国人を採用してとか、そういう傾向が段々と続くと日本的な経営システムは段々と変わると思いますね。ですから将来には私の意見ですけれど、こういう伝統的な日本の温情主義的な制度は段々となくなると思います。

○井上 有難うございました。モスク先生、これも一つだけ、この研究所にも温情主義は、はびこっていると思われませんか。この研究所にはなさそうですか。

★モスク 今の研究所は全然違うと思います。

○井上 じゃ次にシコラ先生、宜しく願います。



★ヤン シコラ 先生

時間が段々なくなりそうだから、要点だけまとめて発表させて頂きます。私は金先生とか、モネ先生とかモスク先生とちょっと違った観点から今日の話題を考えたと思います。具体的に言えば、日本人は、世界をどういう風に見ているのか。或いは、二〇世紀の終わり頃の世界の中で、自分の国を何処に位置付けるのか。又、二一世紀の国際社会にどの様な貢献を与えるべきなのか、つまり日本における国際化についてしばらく発表させて頂きたいと思えます。

この頃何処に行っても「国際化が進んでいる」という言葉が、耳に障っています。日本社会の有り様を表面的に眺めてみれば、この様な言葉は決して過言ではないと思います。この国際日本文化研究センターを含めて、「国際」というラベルを貼られている機関がいち早く出来ていますし、又、レストランに入れば、イタリア料理がすぐメニューに出ていますし、百貨店をちらっと覗き見ればフランス・パリのファッション風のブランド製品が、山多くのっています。勿論、多くの日本の方々にとっては、この様な事実は日本にも国際化が本当に進んでいる確かな証拠でしょう、と思います。

ところが、具体的に考えてみれば、国際化というのはいったいどういう事か、

という疑問がまず頭に浮かんでいます。従って、そもそも「国際」という言葉の語源、その定義、その意味から出発する必要があるんじゃないかと思っています。明治三七年に出版された「明治期漢語辞書体系」によると、「国際」とは、「国と国の間柄」、という説明が書いてあります。又、平成元年の「講談社日本語大事典」を引いてみれば、「国際」というのは「国家と国家との交際」という説明がついています。つまり明治期から平成にかけてこの意味が殆ど変わらなくて、それぞれの独立している国々の間の関係という意味を表す言葉です。

これに対して英語の *international* 或いは、フランス語の *international* など、それぞれの言葉の意味を分析すれば、まず、ラテン語系のこの *inter* という言葉の意味を考えなければいけないと思います。オックスフォード英語大事典によると、この *inter* は二つの意味があります。その一つは、英語で *between*、或いは *among*、つまり間という意味ですね。要するに英語の *international* は日本語と全く同じ様な、「国と国との間柄」という意味を表す言葉でしょう。ただ、今もう一つの意味がありますが、これは英語の *together, mutually*、いわば「一緒、相互」という意味ですね。要するにこの言葉には、それぞれの国々の関係だけではなく、相互的な依存性に基づいた、新しい組織の有り様、という意味も含まれています。

さて日本における国際化という話に戻ると、これはすべて消極的な国際化ではないかと思えます。つまり外国に非常に流行しているものを直接輸入したり、或いは上手にまねたりして、それを国内にいち早く普及させるというパターンです。日本の歴史を振り返ってみると、昔からこのようなパターンは日本の社会の *modus vivendi*、いわば生活様式に 関係してはいますが、しかし外と中、この二つの空間の概念に基づいた生活様式は、二十世紀の末期になって、大きな行き詰まりに入っているんじゃないかと思えます。なぜかというところ、この外と内をはっきり区別している日本の方々は、日本と余所の国との相互的な依存性を意識していない、或いは極端に言えば、意識したくないからですね。

私は今回、あちこち旅行する時間が殆どないので、しかしいい天気ならよくこの辺りに散歩に出掛けています。そしていつも驚いているのは、殆どの家には一日中朝から晩まで外から中が見えない様に窓のカーテンがすっかり閉ざされていることです。つまり内と外との間には直接に繋がりがなく全く別世界のような二つの空間ですね、これに対してヨーロッパの部屋の窓にはカーテンが殆ど無い場合が多いですね、もしカーテンがあれば、夜のお風呂に入る時しかそのカーテンを閉ざさないでしょう。つまり、外の世界は家の中の家族の生活と密接な関

係があります。

そして、同じ様なパターンは日本の国際化にも現れているのではないでしょう。この国内にはいったい何が起こっているのかは、外からは、はっきり見えな
いし、また外国のそれぞれの国々はどの様な問題に面しているのかは、日本人は
あんまり分らないと思います。例えば、NHKのニュースを見てみると、七割
か八割ぐらいが国内のニュースばかりで、残りの僅かの時間には、ある程度日本
との関係のある外国からのニュースが放送されていますね、いわば、日本との関
係がないと、殆ど放送されてないんですね。この前、ペルーの日本大使館人質事
件がありましたね。そうしたら毎日朝から晩まで放送されているんですが、ただ、
こういう僅かな問題、いわばこの人質問題が終わったら、もうテレビのニュース
は殆ど出ていないんですね。つまり、よその国の政府はどの様な問題に面してい
るのか、なぜこの様な問題ができたのか、もう誰も感心しないんですね、日本の
場合、こういうお互いの依存性を日本の方々はよく理解できるのか、或いはでき
なければ次の世紀、二十一世紀に入ることができるのか、私自身は、日本の社会
の有様を外から眺めれば大きな不安、大きな疑問をいだいています。

また、ディスカッションの時にこの問題に戻りたいと思います。

○井上 有難うございました。これもシコラさん、一言弁明させて頂きたいのですが、家にカーテンを下げて、お互いに自衛的に振る舞うのは、僕の感覚では新しい現象で、僕が子供の頃は縁側で近所の人と話していたりしましたね、それは日本的というより、現代的な現象だと私は思います。後でこの議論をさせて下さい。

じゃ鶴田先生、よろしく願います。



★鶴田欣也 先生

鶴田です、宜しく願います。

数年前に私が住んでいたカナダのバンクーバーで学会議を組織しました。テーマは日本人はどのように外国人にイメージされているのか、それから、日本人は外国人をどの様に見ているのかというテーマです。この学会議の一つの特徴はそれを分析するのに、文学作品を使ったということです。いろんなことが出て

きたのですけれども、今日はそこに出てきた一つの重要だと思われるポイントを皆さんに提示したいと思っております。

それは何かと言いますと、見る人、見られる人と言う風に二つに分けますと、見る側の方に色々問題があるということなんです。すなわち、まなざしの問題ですね、目つきの問題、どのように見るかということなんです。その目つきの問題にステレオタイピングというもう一つの問題が出てくるわけです。

このステレオタイピングというのは、十把一絡げ。たくさんある物を一つにまとめてしまってものを言うということなんです。日本語では紋切り型というようなことを言います。日本人を外国人の作家が描く場合に、主に侍と芸者という二つのイメージに集約されてしまうんです。この種のステレオタイピングのイメージはある程度有効なんです。で、有効であるためにそれが使われ、次第に定着していきます。定着すればまたそれがまたほかの文学作品に使われる。それを読む人が感化を受けるといふ悪循環ができてしまう。従いまして、ステレオタイピングにおけるこういう現象は大変危険であります。というのは、理解が非常にシンプリファイされてしまう。単純化されているために現実から遠く離れてしまっている、ということですね。それでいかに危険かというのは、ある話があるんで

す。それは、ピエル・ロッティというフランスの作家が明治時代に日本に来て、色々と物を書きました。『お菊さん』とか『お梅さん』という日本人との生活を描いた作品ですね。これはベストセラーになって多くのヨーロッパの言語に訳されています。ロッティのステレオタイプされたイメージがヨーロッパ各地に伝わって、次第に定着する。一説によりますと、ロシア人がそれを読んで、日本人というのは、非常にかわいい、おもちゃや人形のように、しかも、あまり思考能力がない人達のようなだ。そしてどう考えても、西洋人のような魂や思考能力は持ってないらしい。それじゃ戦争をやっても大丈夫だろうと、いうんでやったところが負けてしまった。ステレオタイプの持つ危険性を示した話だと思います。

日本の側にも問題は充分にあります。日本近代の文学作品を読んで見ますと、やはり西洋人の男性をモンスター化する傾向があります。怪物であるとか、獣のイメージとしては、熊がよく出てきます。そして一方、女性はこの世にも無い美しい存在として描かれる。谷崎潤一郎という作家の初期の作品にこの傾向はよく出ております。一般のレベルといたしましても、やはりこのステレオタイプの考え方が根深く定着しております。イギリス人は礼儀正しい、ドイツ人は几帳面である、イタリア人は陽気だとか、スペイン人は情熱的とか、ユダヤ人はどうも

ずる賢いから気を付けなきゃいけないとか、そういうレベルのステレオタイプが横行している。ところが、その反対の人もたくさんそういう国にいるわけです、イギリス人でも、たいへん失礼な人もいるし、ドイツ人でもずっこけた人がいる。イタリヤ人だって暗い顔をした人もいますし、ステレオタイプには大きな誤解が起きるんであります。

それは何かと言うと、ステレオタイプによって人間の個性が消えてしまうんです。じゃ何故、ステレオタイプが行われるか、その事をちょっと考えてみましょう。先程も申し上げましたようにある程度ステレオタイプは有効なんです、その上、便利なんです。ステレオタイプされたレッテルをくっつけてしまえば、相手も、ああ成る程といって納得して済んでしまう。例えばある事件が起こった時に、ああやっぱりAさんという人はユダヤ人だからね、といえますと、相手も、そうだねあの人はユダヤ人だからああいう事が起きるんだよね、と行ってそれが済んでしまう。ところがユダヤ人だからそれが起きたのではないんです。それはAさんが起こした事なんです。国籍とか文化とかは全く関係ない事なんです。

もう一つステレオタイプというのが、生き続ける理由があるんです。それ

は何かというと、人間というのは、言葉を操る動物であります。言葉というのはその中に既に抽象化をする力があるんです、でステレオタイプングというのは抽象であります。言葉を使っている間に段々段々とステレオタイプングの方に誘導されて行ってしまっていて、それに縛られてしまう。

それなら、どうしたらこのステレオタイプングを避けることができるだろうかという問題がでてきます。その点一番大切なことは厳密な意味でステレオタイプングを除くことは非常に難しいということを先ず知るべきなんです。それを知った後で、このステレオタイプングの背後に突き抜けて、個人に迫る、個人を判断する時に人種じゃなくて個人をなるべく見るようにするということなんです。人を判断するときに、ああ、あの人はアメリカ人だからとか、いやユダヤ人だからとか、外人だからとか、関西の人だからとか、そういうことは言うてはいけません、そういう考え方を先ず直すべきだところ思いますね。個人の国籍、文化はその人を判断する際の究極的な基準には成り得ないということを考えるべきだ。という様なことがこの会議で討議されたので、皆様に紹介させていただきます。どうも有難うございました。

○井上 有難うございました。僕は鶴田さんに時々、やっぱり井上さんは、関西人ですなとよく言われるんですけども、

★鶴田 ということが、いかにステレオタイプングを拭い去ることが難しいかというこの事例でございますねえ。

○井上 稲賀さんのコメントを冒頭に置きまして質疑応答、ディスカッションに移りたいと思います。

休憩

○井上 それでは、後半のディスカッションの部分に移りたいと思います。

先ず、議論のつかかりに、この研究センターの稲賀さんからコメントを頂きたいと思います。お願いします。



○稲賀繁美 助教授

稲賀と申します。

先程、モスクさんは日本の温情主義的な経済政策ないし、社会的な人々の付き合い方が、今からも旨く生き延びていくのか、との問い掛けをなさいましたが、その時に、井上先生の方から、このセンターに温情主義的はあるでしょうか、という質問がありました。私、今日ここで、コメンテーターをやらされているわけですが、これはひどい目に遭わされているわけでありまして、いったい本日の皆様の話をどうやってまとめろというのか、温情もなにもあったものではない。

シコラさんが日本では国際化という掛け声はよく聞くけれども、そこには実体が全く無いのではないか、との疑問を出されました。私、去年まで三重大学というところに居たんですけれども、同じような質問を学生によくしておりました。つまり、マスコミでもよく言われることですが、日本人はもっと日本としての発言をしてゆかなくてはいけない、発信をしなくてはいけない。今まで日本という国は、外からの受信ばかりしてきた。だからモネさんが言ったように、外からのまなざしに非常に敏感で、こういう席で、もう二十世紀も終わろうとしているのにも関わらず、あいもかわらず外国からいらっしゃった方ばかりを集めて、その

意見を聞こうとする。しかし今後は発信をしていかねばならない、というわけです。

それでは、どう発信していくかという問題がある。日本の文化を発信するといえますけれど、日本の文化の粋は、むしろ沈黙は金であり、謙讓の美德であり、そして最初に金禹昌先生がおっしゃいましたけれども、礼儀正しく分をわきまえるということになれば、例えば、国連でもあんまり出しゃばらずに、お金を出すけれども、あまり発言はしない方がいいのではないかと。とそんなことを、学生に前もって言うておいて、それで手を上げさせるわけです。選択肢は三つあるわけです。第一には、日本はもっと外に向けて発信をするようにしないと、国際社会で生き残っていけない。第二には反対に、日本文化に忠実である為には、発信なんかしなくたっていい、英語なんか喋れなくていい。Z〇(ノー)なんて言わなくたっていい。この二つの選択肢でどちらが良いかと問うと学生は困るのですね。おのおの一〇パーセントずつぐらいいしか手を上げません。それならどうするのと言うと、三つ目の答えが出てきます。国内では日本の礼儀に従っている方がよい。例えば高校の授業などで、やたらと手を上げて質問するのはまずい。周りが黙っているなら自分も黙っていよう。そうしないと先生からも目を付けられるし、周り

の奴からいじめられる。しかし、外に出たら英語で喋らなくちゃいけない。内と外で使い分けをしようというわけです。こうして誘導すると、だいたい六〇パーセントぐらいの学生はそうだそうだって言うんですね。しかしこれはどうでしょう。有名な決まり文句がありますが、長い物に巻かれる。つまりその場にあわせて、自分の流儀を融通無碍に変えていく。外に対しては外にあわせて、内の日本に対しては、日本流でやろうという第三案は一見折衷案のように見えるわけですが、この第三案こそがまさに日本人の典型的に日本人的な行動パターンなのではないか。先ほど鶴田先生はそうした一般化はステレオタイプで宜しくないとおっしゃいましたけれども、学生たちの選んだ解決はまさに、日本人たるもの無原則に立ち居振る舞うべし、というわけで、これは残念ながら日本社会の国際的対応そのままであるわけです。

日本は国際協調のつもりで一生懸命やっているのに、外から見ると無原則で場当たりに見えてしまう。そのジレンマを日本の学生たちは知らず知らずに、身につけてしまっていた。これはもう一つ見方を変えますと、よく言われることです。が、本音と建前の使い分け。外向けには建前を言っておきながら、実は後で日本人だけ集まってこそこそと、だってしょうがないもんねと言っている、あの図で

すね。

今日ここにいらっしやるパネリストの方々はその本音と建前の間、狭間にいわば立っていらっしやる。つまり純粹に外から日本を見るというお立場というよりは、むしろ、先程、モネさん、金さんもおっしゃったと思いますが、日本研究者として、ある部分で日本のことを日本人である我々よりもよく分かっていらっしやる。日本をフィールドとして専門的に研究してらっしやる立場から見た場合には、これは外からというよりむしろ日本人以上に内側から見た日本であるかもしれない。しかし、だからといって、かっこ付きの「日本人」と意見を同じくされるわけではもちろんない。今日こういう席を設けて、また外から見た日本を論ずる機会を開くことに意味があるとすれば、その理由はこのあたりにあるだろうと思います。

それで、いくつか皆様に共通する問題点をあげて、ひとまず私の話を終えたいと思います。最初に金先生は、規律や礼儀が日本では大変強調されていて、それが美しさという領域にまで高められているとおっしゃいました。但しこの美しさの領域というのは、どうやれば、学びうるのかなかなか分からない、中に入ってしまうないと分からないけど、入れないから「外人」だって言われるわけですね。

これは先程モスク先生が日本流の経済でいっただい国際化を乗り切れるかとおっしゃったのと全く同じことだろうと思います。つまり内輪で非常に旨くやっている調整の妙が外向きには容易に通用しない。一番簡単な例を一つあげますと、自動車会社、部品を下請けの工場に頼む場合に、アメリカ流では設計図に書いていないことは何も要求しない。ところが日本の場合には、すり合わせがある。例えばちょっとある部分にデコボコを付けておけば、シャーシとボディーをくっつけた時に旨いこと行くといった操作を加えるわけですが、これは元々の契約書に書いていないわけですね。アメリカ合衆国だったら、これはむしろ訴訟の原因になる。契約に書いていないことをやってしまえば、契約違反であるという具合に否定的に解釈される。このようにいわば内と外のルールが違うわけですが、その中で日本の経営は今から何を目指せばいいのか。鶴田先生は、実はこうした内と外の落差を文学を通じてずっと見てきていらっしゃるわけで、そこから先程のご提言もあつたわけですが、いわば鶴田先生はカナダから日本に帰っていらっしゃると国際派、ところがカナダにいらっしゃると日本人の典型を演じていらっしゃる。実はその内と外の落差といいますか幅といったところに鶴田先生の人格のおもしろさ、深さも出ている。これは有名な話でありまして、ちょっと立ち入り過ぎますが、日

本では欣也さん、カナダではケンという具合に彼は呼ばれているわけですが、両者では全く人格が違うという説をなす人さえいます。ところが、それが分裂していかないわけですね。ある意味で状況に応じて彼はそれを実にうまく使い分ける。国際人鶴田という人、カナダ国籍の方でいらっしゃるんですけども、彼は日本文学の専門家としてカナダで教壇に立つ場合には、ある意味で必要な本音と建前の使い分けがないし、何が長いのか知りませんが、場合によっては長い物に巻かれてみせるという、そういうロールプレイングですね、役割演技を演じていらっしゃるのかなとも思います。しかし、これは鶴田先生お一人のことではありませんで、このパネルに上っていらっしゃる方々はみんな単なる外国人でも、日本人でもなくその両方のずれが見える複眼の人たちで、どこというアイデンティティをピタリと固定することはむしろできないという立場で発言していらっしゃる方々ではないかと思えます。とりあえずそんなところで。

○井上 有難うございました。

中にはね、稲賀さん、日本人同士の間でものすごいエゴを主張するのに外国へ行くとおとなしくなる人もいると思うのですが、これは、あんまり日本的ではな

いんですよ。

○稲賀 えーと、内弁慶という言葉もありますよね。これもだから日本人の特徴とは申しませんが、外へ出ると内向きになっちゃう症例というのは、かなりひろく見られるのではないのでしょうか。で、それをどうやって打ち破っておきなから、それでもなお日本人でいられるか、それともいる必要があるのか、それとも内弁慶そのものを打破しなくてはいけないのか。

○井上 それに関しては英語ができひんということもかなり大きな要因やと、私は思うのですが、ま、こういうやりとりでなしに、それぞれ今の稲賀さんのコメントに対して、どなたに答えて頂くのがいいかな、それじゃ、一番話題にあがった鶴田さん、一人で二役をやっていらっしゃる、どうでしょうか、

★鶴田 はい、二重人格者の鶴田であります。今、どっちの面を出しているか、僕はその場その場で色々変わるらしいんですけど、自分自身は全然それを意識していないんですよ、見ている人はああいう風に変わった、こういう風に変わったとおっしゃるらしいんですけど。

○稲賀 外から見ると分かるんですね。

★鶴田 今、発信の問題があったんですけども、国際化という時に日本は何か発

信をしていかなきゃならないという問題があったと思います。それでは、日本人はいったい何を発信していったらいいのだろうか。僕はこれが大きな問題だと思いますね、従いまして、先ず、自分が何であるか、日本文化が何であるか、そういうことが分からないと何も発信できません。何か国際人であろうとどっち付かずのような人を考えがちですけれど、ただ、国際の舞台であっちにいたり、こっちにきたりでふらふらしている、これでは国際人ではないんじゃないかとおもいます。やはり、ちゃんとしたベースがなければ、発信をしていくことはできないんです。国際ということはやはりそこに何かの発信がなきゃならない、ただ、発信というのはまかり間違うと、一種の帝国主義の思想にも関わり合ってきます。相手を自分の物を発信することによって影響してやろうと、何とか相手を変えてやろうと、そういう発信なのか、それとも、いえ私はここに居りますと、ここに鶴田欣也という人間が居ります、私という人間を分かって下さいと、言うのか、このふたつには随分違いがあると思うんですね。稲賀先生いかなんでしよう、発信せよという時に、日本人は何を発信していったらいいのでしょうか。そういうことを、三重大学の学生さんにディスカッションしたことがありますか。

○稲賀　ヘンリーミラーという作家さん、彼は晩年に日本人の女性と結婚したわ

けで、あの黒い瞳の中には何か神秘が、神秘という言葉はさっき金先生もお使いになったと思います。日本人の神秘がある人だろうと思っていた。ところが、五年も付き合っていると、その黒い瞳の中に何もないとわかったのだそうです。

さっきの、ピエル・ロッセイの『お菊さん』の場合と同じようなことになぜかなくなってしまったわけであります。つまり、中味は何にもない。となるとどうでしょう。先程シコラさんが日本人は家にカーテンをして、中を見せないようになってきたと。まあこれは最近のことではないかという話もありまして、昔は縁側があったじゃないかという説もあるわけですが、なぜか外に見せないようになってきた。ところが、逆も言えるわけで、つまり何にも秘密はないんだよ、全部見てくれ、だけど見せる物も無いんだよという演技も可能である。何故そんなことを申すかといえますと、私、三重大学というところに居りましたが、そこから近鉄で一時間ほど南の方に行くと、伊勢神宮がございます。一八九八年ですが、バル・ホルチェンバレンという、有名な日本学者が日本の旅行ガイドを英語で書きます。つまり外国人観光客に何を見せるか、で伊勢神宮が登場するのですが、彼はこう言っています。まず、絵はないし装飾もないし、彫刻もない、神像も何もないというわけですね。何にもないところに持ってきて、日本人達はそれ（何もないこ

と)を見せようとしてもしてくれない。ではその奥に何があるかというのと、私見たこととはありませんが、鏡があるそうですね。普通の人は入れないんだそうですが、もしやんごとなき方で、お入りになる方がいると、見えるのは鏡に映る自分の姿。となるとそもそも自分のベースとか、自分のアイデンティティとかってというのは何なんののだろうか。何も外向けに見せなくてもいいんじゃないのか、見せる物など何もありませんよっ、ていうのも一つの解決かなと。ちょっと先走りしましたが。

○井上 何にも無い時は、カーテンを付けて、奥に何かあるように装わすのがいまいちというお話ですね。

○稲賀 そう、何も無いからこそ外の人を入れなくていい、不思議な空間を逆につくるという手もあるわけですね。だから発言をしないっていうエニグマ(謎)、ここにしか実は日本の文化の可能性は無いのかな、と言うと怒られそうですね。★金 何も無いのも神秘的ですからね、ロランバルトが言っているのもそんなことですね。日本人の瞳のことをおっしゃたんですが、日本人の目の底には何も無い、日本人が鏡を見たら、そこには何も無い、西洋人が鏡を見たら、そこには自分の顔が見えるのですが、日本人が鏡を見たらそこには何も無い、そんなことをバルトが言っています。

○井上 鏡を見て何も無いというのは、日本人はドラキュラだという話でしょうか。

★金 それは、神秘的な物と言っているんです。

○井上 ああそうですか、本気で言っているとしたら、えらい切ない話ですね、多分比喩で言うたはると思うんですが。ついでに伺いますが、その内と外ということですが、金さんなんか日本に来られたら、日本人と暮らす間に段々ご自身が握手を控えるようになってるな〜とかいう風に思われますか。

★金 それは、私もよく知りませんが、この建前と本音の差というのは、私はあまり感じませんね。握手は韓国でも最近何十年間のことですから、韓国でも控え目を感じる人があります。けれども、日本で私の場合、思わぬ間に自分の手が出て、当惑することはありました。

○井上 日本人の建前と本音でよく言うんですが、多分どこの国にでも似たようなことがあると思うんですよ。例えば、英語では建前と本音ってどう言うんですか、だれかご存じの方。

★モスク まあ、そういう区別はありますよ、米国でも。

○井上 どう言うんですか。

★モスク　ですけど、米国の場合にはプリンシプルですか、日本的なプリンシプルとかと違って、実際の状況は違うという区別がありますけど、あれは何と言う、日本ではSituation ethicsですか、そういう話がありますね、あんまりプリンシプルはあんまりないという批判がありますね。米国の場合には、クエストとかユダヤの伝統があって、はっきりと哲学の面から見れば、いいこととか悪いことはっきりとして、だからプリンシプルは原則を割合、アーティクルの考えですね、日本の場合には建前と本音の区別は違うと思います。ですから、基本的な区別は別々がいいという説ができると思います。

○井上　やはり、日本人にこの区別の気持ちが強いと。

★モスク　そうそう、と言うとね、本音と建前の区別はどの国でもありますけど、どういう風に区別するのは、国によって違うらしいですよ。

○井上　それはね、民族によってどっちが強いかということやなしに、その区別の仕方がそれぞれの文化圏で結構あるということではないかと。

★モスク　区別の仕方はね、国によって違うと思います。だから米国には区別は勿論ありますけど、どういう風に分けるとか、どういう風に分析するとか、どういう動機があるとか、或いは米国と日本は全く違うという説ができると思います。

★金 どの国でも人間は社会的に生きるのですから、この区別があるはずですが、日本で社会的圧力が、他のところよりもちょっと強いのですね。日本人はもっと他の人のまなざしを意識して生きる。他の国よりは、たとえばアメリカ人、韓国人に比べても、よそから来るまなざしを意識するのがちょっと強いようですね。こんなシンポジウムもこんなことの表現か知りませんが。

○井上 ただね、これは好きでやっているのか、他に企画を思いつかへんかったから、やってるのか、微妙なところがありますしね。

★モネ あのちょっといいですか、今の話題に関連して、他人のまなざしを強く意識して反応するとか、行動するとか、という話、提言が先程あったんですけども、そういうことについてちょっと皆さんにお聞きしたいんですけども、この壇上にお上がりになった日本の先生方を含めて、まなざしのことなんですけれども、同僚の日本の研究者から日本文化は、視覚の文化ではない、ビジュアルな文化ではない、という非常にはっきりとした発言を聞かされたわけですけども、で、何故かと聞いたら、まさに先程私が話をさせて頂いた、まさに今の時代は、日本の文化は、他のアメリカやらヨーロッパやらと同じようにビジュアルな文化なんです。で、何故、日本の文化はビジュアルで無いかと言っているのか、やっ

ぱり人の顔を見ない、見つめない、という発言があったからちょっとびっくりして、その歴史的背景は何なんですかと聞いたら、やっぱり江戸時代とか、その前の時代を考えると、その封建社会でも、上下関係があるわけでしょう、で、天皇を見てはいけない、大名を見てはいけない、土下座しなければいけない、という歴史があつて、それはずっと近代まで続いて来て、今でもやっぱり人の顔を見ない、目を閉じる、或いは目をそらす、という習慣を考えると、そういう特徴が今でもあるかとその同僚の方がはつきり言ったわけです。それは日本的な特徴ではないと思いますし、もちろん周りの方を見れば、そういう現象は見られるということと言えるんですけれども、それは日本的な特徴であるかどうか、皆さんいかがですか。

○井上 あのと、若い子にね、メンチを切られるという感覚があつて、街を歩いていて、目と目が合うと、何か自分が損をした、自分が傷付けられたように感じることを、メンチ切られると言うんですが、これは、それぞれのお国でどうですか、偶然街を歩いて、目と目があつて、ああ、やられた、みたいに感じるこつて。

どうでしょうね。

いや、日本の若い世代では、明らかにあると思いますね。メンチ切られるとい

う言い方をしますから。ただこれが、江戸時代の大名行列に由来するかどうかは、僕には自信がありませんが。

★鶴田 あのうち、大名行列までは遡らないんですけれども、私の少年時代に、これは随分前の話ですけども、眼がんをつけるという言葉がありました。これは関西ではメンチ切られる、と言うんですか。

○井上 眼がん付けるも言わなくはないです。

★鶴田 二つは、違うことなんですか、一緒なのでしょうか。何れにせよ。

私の生まれたところでは、眼がんを付けられる、眼がんを付けた、と言うと、それがめちゃもんの理由になるわけですね、で、それによって路地の裏に連れて行かれて、殴られたりですね、金銭を巻き上げられたりしたものです。ですから、これはちょっと危ないと思うと、目をちょっと伏せて歩いたんですね、我々は。しかしそういうことが、日本の文化にビジュアリエーターが無いということと、どうやってひつつくのか、僕はちょっと判らない。人の顔を見ないということが、日本文化にビジュアリエーターがないというふうに思うのはちょっと短絡ではないかと私は思います。日本はむしろビジュアリエーターがある文化だと、私は思い込んでいたのに、今のモネさんの話には非常に驚きました

★モネ ちょっと弁明させてくれる。私の発言じゃ無いの、聞かされた話なの。

○井上 だから、モネさんも、それを聞かれて驚かれたという話ですよ。

★鶴田 じゃ、みんなで驚いているわけだ。

○井上 お互いに顔を見ないようにする、文化的バックグラウンドがあるからこそ、恋愛のクライマックスでお互いに見合うときの、えもいえぬ陶酔感もあるかもしれないわけですよ、それがひょっとしたら、ビジュアルな文化の可能性、ああこう言うといかんのんか。

★鶴田 あの、クライマックスでは、お互いに見ないといかんですか。これも驚いたな。

○井上 あの、シコラ先生ここまで、議論が続いてきて、どうでしょうか、先程の発信することに関して、何か感想、また新たな展開とかあれば。

★シコラ まあ、私自身が考えているのは、そもそも、この外と内という分け方が、意味があるか無いか、それが基本的なポイントではないでしょうか。いわば、自分の空間を考えると、外はどこから始まるのか、中はどこまで関わるのか、もちろん文化によって違いますね、例えば、日本はやっぱり、何か面積がかなり狭くて人口が多いから、一人一人の空間がかなり狭いんです。それは当たり前で、

ただ、外と内の分け方は何について基づいているのか、だいたい、隣の、いわば、よその人はどういう点で違うのか、それはみんな考えている。ただこれから、そもそも私とよその人は何で違うのかということではなくて、その代わりにどういう点で共通しているのか、それを考えなくちゃいけない。それは、鶴田先生が言われたように、日本人の鶴田と、カナダ人の鶴田、どこで共通しているのか、人間ですね、それはやっぱり、自分自身だけではなく、例えば、よその国の人が、なんで違うというよりも、どういう点で共通しているのか、それはやっぱり、二十一世紀の大きなチャレンジじゃないんでしょか。今までみんなが違う点を探していたんですね。

★金　これは、内と外の問題でもあるのですが、ちょっとまなざしを変えてみたら、内と外の区別が重要なのは、外に対して何か不安感を持っていることに繋がるとは思いません。あまり規律や美的感覚が高くなったら、外から入ってくるのをちょっとおそれることになるようです。国際化に戻って、国際化はここで発信するのも重要ですが、それよりは、不安感を受け入れること、汚いことを受け入れること、規律や規則に入っていないものを受け入れる態度と関係があるんじゃないかと思えます。例えば、アメリカで黒人と白人との間で色々な問題

がありますが、白人側で必要なのは、黒人という汚い物、黒人という規律や規則を守らない物を同化して内に、受け入れるのが、そのアメリカが一般的な、普遍的な社会になるのにとっても重要なものです。日本で国際化という時、フランスのワイン、フランスの美術品、香水、そんなものは入ってきて、フランスの悪いものは、これは国際化の主体にはならない。又、フランスは日本人の目ではない国ですが、世界には色々な悪い国が沢山ありますね。悪い国から、貧しい国から労働者が入ってくる。この労働者をどのように受け入れるか、こんなものが実際に国際化を考えると、最も重要な問題ではないかと思えます。それで、まとめて言ったら、これは生きるのをちゃんと整っているという感覚がなんか不安定なものを受け入れるものに変わらなければ国際化は出来ないと思えますね。いいことを受け入れるのではなくて、悪いことに対してどんな態度を持つか、これが最も重要であるようですが、日本はこれがどうも難しい国ではないか、そのように思っています。

★モスク 米国でね、今はもう10年半前からグローバリゼーションという言葉がありますね、ですけど国際化と意味は全然違います。と言うとね、国を受けると言うよりも、世界的な市場とか、公の拡大とかそういう意味でグローバリゼーション

ンという言葉がありますけど、日本では国際化という言葉は特別ですね、国を受けるということじゃないかと思えます。僕の国では、そういう言葉はあまりないと思えます。

★金 まったく、経済的なものですね。

★モスク はい、経済的な。

○井上 これはやっぱりシコラさんやと思えますが、今、金さんがやっぱり受け入れのあり方に考え直さないかんものがあるんじゃないかという提言を頂いたんですが、このことに関してはどうですか。シコラさん、やっぱり受け入れだけじゃない話ですか。

★シコラ 私は全く同じに考えています。やっぱりいい側面だけを受け入れることができないんですね。勿論、不安定的な側面もありますけれども、これはもう多分二十世紀の終わり頃の、ちょっとカタストロフィック的な見方と考えられる例えじゃないのでしょうか。この八十年代の終わり頃、フランスシスフクヤマが『歴史の終わり』という本を書いて、つい最近は、ここの日文研の飯田先生が『経済学の終わり』という本を書いた。そして尚、日本文化の終わりという時代になったんじゃないでしょうか、という不安を持っていらっしゃる日本の方々がいらっ

しゃると思えますけれど、そういう歴史の終わりにならなかつたんですね、経済学の終わりに、多分ならないかも知れない。そしたら日本の文化の終わりにならないと思えます。ただ変わっていくことをちゃんと考えなければならぬと思います。

○井上 僕の気持ちで、外を受け入れることで、割と指標の中になるんですけど、四条大橋とか三条大橋で、西洋人がお坊さんになって立ったはるのを、拝見すると、ああ仏教に懂れて来たのか、がんばって下さいね、みたいな気持ちがあわくんですが、もし、家の葬式にドイツ人のお坊さんが来たらかなんな、という気持ちもあるんですよ。それは、おっしゃるように、何か否定的な気持ちがあわってしまうんですよ。こういう気持ちはよくないんでしょうか。お坊さん、外国から来る人にはがんばってほしいと、思うんやけど、家の葬式には来んといほしいという気持ちがあわいて来るのは、困ったことでしょうか。

★シコラ そうでしようね、特に日本の方々の場合には。

○井上 いずれこういうのもグローバル化が進めば、解消される気持ちでしようか。

★シコラ 私の場合は別にかまわないとおもいますけれども。

★鶴田　ちょっとよろしいですか、僕がシカゴの学会に行った時に、日本のお寿司屋さんに食事に行ったことがあるんです。そしたら、黒人の人がお寿司を握っているんですよ、で、握っている真っ黒な手をじっと見ていました。出された寿司を食べる時にですね、ちょっと味が違うんじゃないかという風に一瞬思ったんです。後でそう思った自分を情けなく思ったんですが、思ったことは事実でした。さっきの、家に外人のお坊さんが来たらどうしようかと、いうこととよく似ているんだと思うんですね。で、それとの関連で僕はアメリカ英語ということをちょっと考えたんです。アメリカで英語を喋るといふのはある意味で非常にやさしいことなんです。何故かと言いますと、移民国なのでアメリカ人は、英語のバリエーションをひろく受け入れるんです。いろんなアクセントがある、アイリッシュのアクセントもあれば、ポーリッシュのアクセントもある、ドイツのアクセントもあり、日本のアクセントもあれば、中国人のもある。従いまして、これが、純粹感覚が希薄で、どうしても英語はこうでなければならぬという感覚がないんです。ところが私は関東の人間ですが、関西に今住んでいて、関西弁を喋ってみました。いなと思つて時々真似しようとしてます。時々、ちょっと非難の眼を感じます。おまえが喋っているのは、関西弁でも何でもない、変な関西弁なんか喋るなとい

う感じですか。お前、俺のことをおちよくなるなという意味もあると思いますが、ここには一種のピュアリズム純粹主義のようなものがある、不純を嫌う気持があると思うのです。これは、金さんが言った、礼儀正しい、礼儀をきちっと守る、それからちょっとでも外れていたら、おかしいと思う感覚です。言葉もなにもかもぴったりとしなければならぬ。それができないと、内から外される、はじき出される、小学生の場合にはいじめを受けると、そういうことと僕は繋がってくると思うんですね。金先生がいう不安をちょっと受け入れたらどうだと、汚い者を受け入れたらどうだろうかと、規則にちょっと外れた者も受けていたらどうだろうかと、そういう話があったんですが、それは、最終的には、黒人であろうが、カナダのインディアンであろうが、寿司を握っても、それは技術さえあればそれでいいじゃないかと、受け入れなきゃなんならんことだと思えます。きちっとした鋭い感覚、均衡感覚を少し壊していったらどうかということも、僕は文化の運命ではないかと思えます。礼儀を一生懸命保とうとする。それは勿論いいことではあるんですけども、それだけでは、もう日本はやっていけない状態にあると思うんですね。従いまして、いつかは皆さんの家に金髪のお坊さんが現れる。お寿司屋に黒人の板前が出てちゃんとマグロを握るといふことになると思います。

そしてそれが文化の活性剤になり強力で豊かな、よりすばらしい文化が出て来るんじゃないかというふうに私は思います。

★金 ドイツ人の坊さんを受け入れる人間は、ドイツ人の顔を見るのでなくて、仏さんの言葉を聞く勉強をしなければいけない、上辺や表よりはその本質的なものが何かということ勉強しなければならぬようですが、あまり、上辺、表の物を大切に思ったらドイツ人の顔が見えてきて、仏さんの言葉がどこかに逃げてしまわないかと思えます。

○井上 けど、インド人のお坊さんが来てくれたら、本家本元なんでかえってありがたいかもしれないですけどね。モネさん、何かおっしゃりたかったらどうぞ。

★モネ 今の話と関連して、日本文化の終わりという、今の話と先程話がありましたが、それどころか、日本文化の国際化、日本文化の多元主義化、多様化の現象に我々が今、直面しているのではないかと、私、思っているわけです。

皆さんご承知のとおり日本国内でも、日本語で小説を書いている作家が既に出ています。例えば、リービ英雄（ヒデオ）など、それは、ドイツ或いはイギリスと同じように、完全に日本と変わらないような日本人の文学作品を出している作家や詩人も既に出ています。それだけではなく、外国で活躍している日本人の方が

ドイツ語で、イタリア語、或いは英語、他の国の言葉でも、文学作品を発表したり、或いは他の表現の畑でも活躍したりしている方がたくさん出ています。一つの具体例としては、ドイツ語で詩や小説を発表し、いくつか賞を受賞した多和田葉子ですが：この若い女性作家は、日本でもたくさん小説を出し、芥川賞を取ったわけです。そういう外から来たものに対しての珍しさ、或いは好奇心、或いはエキゾティシズム、そういう現象はいろんなファクターや文化的バックグラウンドをとおして無くなりつつある時代は既に来ているのではないかと、私思うんです。勿論、世代の落差もあると思いますけれども、私の話にちょっと取り上げさせて貰った、例えば、漫画やアニメの文化は非常に大きな国際的なひろがりをもっている、それを見ている日本人の若い人達と、外国の若い人達は非常に似たようなまなざしを持っている、非常に似たような経験を持っている、ですから、まずまず、ドイツ人にしても、イタリア人にしても、韓国人、或いはインド人のお坊さんに、いろんな行事に来て貰うような時代は、二十一世紀に向かって出て来るのではないかと、私は思いますね。

○井上 さあ、いよいよ、お葬式の国際化の時代を迎えるみたいですが、僕は漫画に関しては、私がフランスに行ったのは、五年前なんですが、その時に、日本

漫画を語り合う同人誌が五つあったんですよ。その編集をやっている一人の男子と会ったことがあるんですが、彼はまだ、二十才だったんですが、日本語の読み書きができたんですよ。学校でも教えて貰ったことがないんですが、漫画を読みたい一心で、日本語を学習したと言われて、何かこう、杉田玄白とか前野良沢のような蘭学者の情熱が、漫画に今、注がれているのを知ってびっくりしたことが。

★モネ たいへんすごいことですけれども、漫画を知りたい、或いは、アニメを原本で理解したい、という衝動に、或いは、情熱に駆られて日本語を勉強したい若い人達はフランスにますます増えて来て、ですから、日本の伝統的な文化よりも、やっぱり漫画を原文で読みたい、そういうことで、やっぱり、パリの東洋学校、それは最近の現象なんですけれども、毎年千人から千五百人の若い人達を受け入れる現象が出て来るわけですけれども、しかし、そういう若い人達の意図とこのうのは、結局、漫画を読みたい、アニメを見たいとかいう情熱を持っている人が非常に多いということが出て来ています。もちろん、先程言いましたように、そういう現象を単純に歓迎する、喜ぶのではなく学問的に、社会的に、あるいは比較文化論的に分析し、客観的に論じなければならぬと思います。そういう

分析は既にたくさん出ているのは又事実ですが。

○井上 あのと、それでね、オペラ座の前にジュンク堂という本屋さんがあって、神戸、京都のジュンク堂なんです。そのジュンク堂の地下フロアって、日本の漫画ばかり置いてあるんですよ。それに、フランスの子供が行列をなして、びっくりしましたね。

○稲賀 あれは、元々は日本人のガイドさんが時間を潰す場所だったんですけど、いつの間にか、パリの人達がわいわい押し掛けるようになってしまった。

○井上 僕は、その編集をやっている男の子に、たまたま永井豪さんという漫画家と面識があるんですが、永井豪さんの話をしたら、ものすごく尊敬してくれたんですよ。あの永井豪先生を知っているのか、という。僕はパリで永井豪を知っていることが自慢になるなんて、全然思わなかったんで、世界は不思議な状態になっているなど。

○稲賀 さっき鶴田先生おっしゃたことで、実はもう落ちが付いて、困っているわけですが、国際青年の船というのがあるんですね。外務省の外郭団体のやっている仕事の一部ですけれども、各国の若い人達を乗せて、例えば、アブダビを通じてバルセロナまで行く。数年前の話ですけれども、私の同僚が乗った時に、日本

の大学の英語の先生、女性のまだうら若い方が、とにかく乗船一日目で、どうも、メンタル・ブレイクダウンになっちゃって、船室に閉じこもっちゃった。理由は単純なんです。アジア、アフリカからいらっしやった若者、インドの方も含めて彼ら、彼女達の英語が、その日本人の先生には、全く判らなかつた。つまり、日本の場合、アメリカ英語なのか、クイーンズ・イングリッシュなのか知りませんが、それでも、その発音の規範性とか文法規則とかを非常に厳密な形で、教育してきて、それ以外は英語じゃない、ちゃんと発音できなきゃだめなんだという具合に、我々は教え込まれている。ところが国際語になっちゃった英語っていうのはもう、そうした枠からかなり離れて自由自在に動き廻っている。そうした事態に直面した彼女はそこでどう対応すればいいか判らなくなつた。つまり日本の大学で教鞭を取るまで、彼女が一生懸命学んできた英語の幻想というのが、その日いっぺんに崩れてしまった。日本という社会は、これが国際基準だ、というような幻想を勝手に創ってしまった。それに一生懸命自分を合わせよう、合わせようとする。不思議なんですけれども、学生に何やりたいと聞きますと、語学学校に行きたいとか、英会話を学びたいって言うんですね。だけど、英会話って何の為にやるの、と言うとそこでプツンと切れちゃうんですね。話したい友達が外国に居るはずだ、

その人達とコミュニケーションしたいからこそ英語を学ぶはずだったんですが、それがどこかで例えば、英検の準1級を取ることそのものが自己目的化しちゃうんですね。何のために級を取ったのか分らない。日本は完全に資格社会になってしまっていて、その資格を何のために取っているのだからなくなっちゃっている。この辺に一つ、破ってゆかなくちゃいけない壁があると思うんです。

先程、リヴィア・モネさんが、今の子供たちは、例えば、漫画、アニメーションなどを通じて、共通の視覚体験を持っているということをおっしゃいました。確かにある程度は共通なのですが、ただ、それが往復する双方の方向を見た時に、つり合いが取れているとは、必ずしも言えないと思います。いくつか例をあげますが、例えば、大友克洋の『アキラ』という有名な漫画があって、英語にもなっています。ところが簡単ですけど、日本で縦書きになってるものを、英語で出版する時どうすればいいでしょう。日本では右から左へとページが動いていくんですね。しかし欧米ではそうはしないわけです。左から右へ、それも横文字で、ストーリーが展開していく。そうすると、日本のままの絵だと話が、つまりストーリーの進行と絵の進行がぐちゃぐちゃになってしまいうんですね。そのため、左右反転させた図版が随分たくさん入っています。これは、一つのたとえばですが、つ

まり日本の物を外へ伝える時に、そうした一種の轉換装置が随分たくさん要るだろう、という気がします。

それでさっきの視点の話に結びつけたのですが、例えば日本においては、視線を合わせないこと、つまり眼を付けないことが礼儀である、とする。ところが、北米、欧米などに行きますと、これは初対面の人と握手をする時でも、とにかく視線を合わせるのが礼儀である。日本流を通すとそれだけで無礼であるとかあの人は何だか正直に物を言ってくれない、何か後ろに秘密を持っているみたいだ。だから日本人は信用できない、とそこまで行ってしまいうわけです。問題は、だから握手をするようになれば解決がつくというわけではない。但し、逆にグローバリゼーションをすすめて、そうした文化の差をなくすことがいいんだとは思わないのです。むしろ国内においては、例えば韓国の人には、日本流の正座は囚人のようにみえてしまふとか、お茶碗を手で持ってご飯を食べるのは、むしろ韓国ではかえって礼儀に反するんだなといったことを我々も、少しずつ覚えていく。それはトライアル・アンド・エラーでありまして、いくらでも間違いはするわけですが、そうした間違いを犯しながら、お互いにその間違いをおおらかに指摘し合っていくことで、自分達の経験を豊かにしていく。そうした余裕ある努力を我々

一人一人が練っていく必要もあるのではないかなと思います。

○井上 どなたか、今のに。

★鶴田 今、稲賀さんがおっしゃったことで、ちょっと気が付いたことがあります。というのは私、カナダに三十年程住んで居りまして、カナダの市民権を持っております。その前に十年程、アメリカに居ったんでありますけども、カナダに行つてこれは非常にいい国だなと思つたのは、今の発想と割に似てるんですね。それは何かと言いますと、アメリカというのは、ご存じのように、メタファーとして溶かすルツボと云います。移民でいろんな人が来ますよね。そういう人達が持っていたものを、ルツボの中に入れて溶かしてから取り出すと、ぴかぴか光つたアメリカ人が出てくるというのが、一応、溶かすルツボのテーマになっております。ところが、カナダの場合には、溶かす必要がない。それはモザイクの発想だからです。自分の持つて来たカラーをそのまま、モザイクという大きな絵に加えてくれればそれでよいという考えです。溶かさないで自分の色で全体に寄与しようというわけです。今の話に戻れば、世界というカラーに全部自分を溶かしてしまう必要がないんじゃないかということですね。カナダは自分の個性、自分の持つて来たお国の色、そういうものを大切にすることが非常にいいことなんだと

いう国なんですね。それと稲賀さんのおっしゃったことと、どっかで交わる点があるように思ったのでちょっと申し上げました。

○井上 私、今、お二方の話を聞いて、やっぱり情報発信も大事なことやと思うのは、そういうお国ぶりを大事にする為には、日本人は目をそらすから失礼な奴やとされるんじゃないに、日本では、目を合わすことがつらいんだという情報が行き届いてくれれば、あ、この人はそうだから目を合わせないんだ、というのが理解して貰えるじゃないですか。

★鶴田 ないしは、それを説明する能力といえますかね。

○井上 それは、英語の問題があって、ちょっと難しいんですけどね。

ほんとに日本文化を、いわゆる政治的、国際交流風にどんどん押し付けることに関しては、僕もかなんたという思いがありますが、日本人は失礼さなしに目をそらすことがあるんだ、ということぐらいは判ってほしいな、という気持ちはあるのですが、これは伝わるものでしょうか。

★金 ちょっと問題があるようですね、世界には国がたくさんありますから、それをみんな覚えて生活するのは、どうも、難しいことですから、一番いいことは、みんなが二重人格者ではなくて、二重の意識を持って多めに見るといいうことを学ぶ

のが必要じゃないかと思えます。

○井上 それは、仕草のエスペラントみたいなことですか。機能的なものに注意をしてそれを探していったらこういうコンセンサスができるかもしれない。つまり心配なんです、例えば、欧米に行って目をそらさない方がいいと、そして、例えば初対面の女の人をじっと見つめていて、セクシャルハラスメントとか言われる心配は無いのでしょうか、いっさい。誰か答えて頂けませんか。

★鶴田 アメリカでは目をそらさない方がいいということはないですよ。あれはよく見ますと、一瞬目をあわせて、そしてそらしているのです。その人の目をじっと見ていたらアメリカでもけんかになります。これはもう眼がんを付けたのとおなじことですからね。特にアメリカのバーで、おにいちゃんの顔をじっと見たら絶対にけんかになります。ですから、目を見るといっても、ちらっと見てはまずして、またちらっと見るといふことなのです。それは、映画を見て下さればよく分かることです、じっとその人の目ばかり見つめているのは特別なシーンです。

○井上 多分、だから、これもステレオタイプの怖いところで、日本文化は目をそらす文化、アメリカは違うというふうに理解したらあかんで、多分違いがあるとしたら、そらし方の角度とか、そらし方のタイミングがちよっとずつ違うぐ

らいに。

★鶴田 どこに目を持っていったらいいかと、いうことです。ね、あんまり下の方に持っていてもいけないし、上の方ばかり見ても、ちょっと具合が悪いですから。

○井上 しかし、学習不能ですわね、そこまで言われるとね。

他の、日本に滞在してらっしゃる皆さん方で、そういう違和感を日本で感じられた例があったら、どうぞ。

★モノ 先程の話は、目をそらすこととか、目と目を合わせるとか、そういう話だったんですけれども、言語について、鶴田先生の話にも、出てたんですけれども、かなりそれに関しての、特殊性、或いは、日本語という言語をマスターする難しさに関しての、日本人側からの、優位性と言えるかどうか分かりませんが、でも、どうもそれに関しての特殊な感覚が、未だにあるようです。ちょっとだけ、エピソードを絡めて、言わせて貰いますと、例えば二条城の本丸という建物を年一回、一般公開しますよね。それを見に行きますと、パンフレットが置いてありますよね。日本語のパンフレットと英語のパンフレットですよ。で、こちらは多少日本語が分かりますので、日本語のパンフレットを持って歩き出したら、後

るから、非常に親切そうな顔をした日本の女性の方が、「お客さん、これは日本語ですから、英語のを持って行って下さい。」勿論、英語で一生懸命、必死に説明しようとしてらしたんですね。私は未だにそういうのが、国際化しつつある、多元文化に成りつつある日本文化の中では、未だにそういう現象があるかということに非常に驚かされた。しかもタクシーに乗りますと、常に、「ああ、お客さんはいへん上手ですね、何年ぐらい勉強をしまして、そんなに達者な日本語になられたんですね。」と聞かれるという話ですから。そろそろそういう自分の文化に対しての特殊な視線とかまなざしとか、ちょっと変えていったらどうですか、という印象が私の中にあります。

○井上 これは私の個人的な感想ですが、自分が英語が全然できないもんだから、さぞかし日本語を学習するのは大変だろうと。

★モノ ステレオタイプです、それは。

○井上 だから、もっと若い世代が外国語を流暢にできるようになると、日本語を勉強することはそれ程たいしたことないんだ、というふうになっていけると思うんですよ。私なんかはこの研究所に居るおかげで、こんなに流暢に日本語を喋る方としゃっちゅう会うてますから、それ程たいしたことでもないのかなと、最

近思えるようになりましたが、やっぱり自分の語学力を考えると、ようやらはんなという気持ちがありすもの。そういう気分は、しかし謹んで下さいということですよ。こういう問題、稲賀さんどうですか。

○稲賀 言葉もそうなんですが、文化的な一種の関税障壁みたいな物は、なくせと言ったって、無理なところがあるんですね。今のモネさんの場合と逆のことを一言申しますと、日本人が当たり前だと思っていることが、通用しない場合だ。てたくさんあるわけです。一例だけあげれば、おみやげってやつで、官庁から海外に派遣された人達は、必ず上司からおみやげを持たされるんですね。ところが、おみやげというのは、私の経験ではパリの場合ですが、向こうでは公の場で渡す物ではない。美術館なんかに行って、実はおみやげ持って来たんですけども、向こうのキュレーターの若い女性にあげたりしたら、向こうはもう真っ赤になっちゃいます。つまりそれはあくまで個人的な好意からすることであって、およそ生まれて初めて今日会って、それも仕事の場に対応している人から貰うようなものではない。そうすると誰が困るかという、間にたった通訳でありまして、つまりおみやげを途中で捨てろというわけにもいかなし、渡すわけにもいかなし。こういうのをダブル・バインドって言うんですけれども、そんな状況に追い

込まれてしまうわけですね。金先生のおっしゃったとおりで、全てのシチュエーション、シチュエーション・エティック、状況倫理ということをも、先程モスクスさんもおっしゃいましたけど、全ての状況を我々一生の限りのある時間に経験することはできませんけれど、失敗をした個々の経験を積んでいき、それを持ち帰って来て笑い話にして上司に伝えれば、上司も少しはおみやげの与え方を考えてくれるかもしれない。そうしたところから、一步一步、というのはどうでございましょう。

○井上 私、外国にある時、行く時に、嫁さんにやっぱりおみやげが大事や言われて、山のようにエキゾチック京都風の物を渡されて、もう頼むから勘弁してくれ、こんな物渡したら逆効果やと言うんですが、嫁はんは、いいや、やっぱりおみやげが大事やと言う、私は稲賀さんのおっしゃる通りにそのぐらゐの教養はあったもんですから、こんな物使うたらあかんとは、思うんですが、やっぱり家族を第一にしてしまつて、渡して来ましたね。その時もう断腸の思いでしたね、どうやったら解決できるんでしょうか。

あの、時間が四時少々までなので、今までの話を踏まえて頂きながら、皆さんそれぞれ、二、三分ずつぐらいお言葉を頂いて、おしまいにしたいと思ひますの

で、さっき金さんから伺いましたので、今度はそちらの方（席順で鶴田先生）からお願いします。

★鶴田　なんか二つのことが出たように思います。一つは日本のもの、日本性というものもちゃんと持っていていいんじゃないかと。それを溶かす必要はないんじゃないかということが一つ。それと同時にやはり、少し変えていかなければならないじゃないかというポイントが出たように思いますけど、この二つの点は矛盾するようでいて、二つとも正しいやり方ではないか、というふうに思います。それによって日本文化が刺激を受け、豊かになり、強くなっていく。従ってグローバルゼーションが進行すれば、やはり日本文化はより、いいものになっていくと思います。

○井上　どうも、有難うございました。じゃ続いてシコラさんは。

★シコラ　なんか一言だけ加えさせて頂きたいんですが、この話の中で言語の重要さというのが出てきますね。言葉が大事なことだとよく言われますね。何故かというと言葉をコミュニケーションの手段として考えることだけではなく、文化がお互いに通じるという手段として考えた方がいいんじゃないでしょうか。いわば言葉が旨くできるように、相手の考え方を理解しなくてはならないじゃないか。そうし

ないと日本的な英語にしかならないんじゃないか。いわば英語を喋っても、相手、アメリカ人イギリス人が、そういう英語は通じないですね。只、その場合には日本のいわば言語の教育を考え直さなくちゃいけないではないでしょうか。これから、やっぱり行政改革とかそういう改革と共に教育も考えなくちゃいけない、考え直さなくちゃいけないんじゃないでしょうかと思います。それは日本の問題だけではなく、それぞれの国の問題だと思います。

★モスク 私には二つの点があります。一つはアメリカの英語に関する話がありましたね。鶴田さんの話ですけど、場所によって発音が違うとか、人によって発音が違うとか、日本はあの点で違うという話ですね。日本の場合には文部省がありますね。標準語がありますね。米国の場合には州によって文部省は全然ありません。州によって教育制度は違います。カナダは同じでしょ。州によって、州別の文部省があります。ですから標準語は全然ないと思います。ですけどちょっと不思議かもしれませんけど、日本は英語は本当にグローバルな言語ですね。インターネットすごく人気がありますね。ですからあの点で標準語がないとグローバルな言語になる可能性があると思います。これは一つの点、もう一つの点はおみやげに関する話がありましたね。あれは僕の意見ですけど、あれは温情主義的な感じ

があるんじゃないかと思えます。前の話で、日文研で温情主義的な感じがあるという話がありました。たしかにあると思えます。というとおみやげは大事だということとはよく知っています。

○井上 僕は先輩の園田さんという方に聞いたんですけれども、ハーバード大学の掲示板に日本語教師募集という掲示板が出たんです。ただ、但し書きがあつて、但し東京近辺で生まれた標準語を喋れる者に限るとあつたらしい。英語には、標準語が無いのかもしれないけれども、日本語には標準語を求めているんだなと思えますよね。

どうぞ、お願いします。

★モネ 一言だけ付け加えさせて頂きますけれども、今の話の標準語なんですけれども、やっぱり二十一世紀に向かう日本社会、日本文化。標準語だけでなく、地方の言葉や、京都弁やら関西弁やら、その地方の文化や言葉を大事にしなければいけない、ということがあるわけです。日本全国は、標準語化するというのは、ちょっとつまらないのではないかと私、思うんです。それが一つ、二つは、言語教育の重要性が話題になったわけですから、私としてはどっちかというところ、学や映像文化を研究しているものから、どっちかというところ、日本社会は国際化

しつつある、グローバル化の進行していく中で、もっと日本語で文学作品や他の表現の領域でもいいですけども、戯曲とか、或いは映像文化にすれば、映画とかアニメーション映画でもいいんですけども、それが日本で活躍していて、それをもっともっと多様に出して頂く人がますます増えていくような時代に代になっていくことを祈っているという一点に絞って終わらせて頂きます。

○井上 どうも、有難うございました。続いて、お願いします。

★金 日本語を使うのに最も難しい物の一つが敬語ですね、こんなことを話させて頂きますというのは、どうも長くて使うのが難しい言語です。私はこれを話します、と言ったらもっと簡単なようですが、そうしたら醜くなって、美しさが消えてしまいますが、この簡単で機能的な言語を使う人を受け入れることも重要じゃないか、それは美しさを失うことですから、ちょっと大変なことですが、この機能的なもの、本質的なものをしていくのが、これからの課題のようですね、これは、日本だけの課題ではなくて、世界的な課題ですね。本質的なものが何かというのは、ただ日本の課題ではないですから。

○井上 どうも、有難うございました。特に、稲賀さん宜しいですか？

○稲賀 言葉のことをみなさん言ってらっしゃるので、一つだけ。マルグリット・

デュラスという、この間亡くなった作家に、もうずっと昔の映画ですけれど、日本では非常に陰惨な『二十四時間の情事』という題名がついちゃった、「Hiroshima Mon Amour」『広島我が愛』という映画があったんですね。ご年輩の方は覚えていらっしゃるかと思います。そのなかにフランス人の女性と、日本で被爆者であつたらしい男性とのやりとりがあるんですが、私、これをパリで眺めていた時に、二人が別れる場面で、広島駅で別れる二人の横におばあちゃんが座っていて、「あんたらどないしたん」というようなことを…、私、広島育ちなんですけど、広島弁で言うんですね。それに日本人の男が東京言葉で「我々は別れなくてはいけないので、それを悲しんでいるのです」と、翻訳調で答えるので、私は思わず吹き出したのですが、パリの映画館の周囲のお客さんからは、この日本人なぜ深刻なところで笑うのだ、といぶかしがられた。つまり一つのことが起こっているけど、そこで何が起こっているか、分かる、分からないという差が勿論あちこちに隠れている。標準話の話が出てきましたけれども、実は日本語にきちんとした標準語を作らなくちゃいけないということに日本人が気がついたのは、ひどく遅くて、これはもう第二次世界大戦中、朝鮮半島や台湾、満州国で、いかに日本語を教えるか深刻な問題になった時点なんです。さっきの日本語教師募集の

話、井上さんがおっしゃった通りですが、つまり、みんな違う方言を喋っていて、どれが正確な日本語かと問うた時に誰もきちんと説明ができなかった。だから植民地に派遣されていた現地の教育責任者達が、日本の文部省に対して、早急にきちんと統一した日本語を作ってくれ、という要望を出している。何が言いたいかというと、つまり日本人のアイデンティティーの核とも見放された純粋なる日本語なんてものは存在しなかった。それはむしろ外とのせめぎ合い、外からのまなざしに晒される中で、初めて創らなくてはいけないものとして認識されるに至ったのだということです。

○井上 有難うございました。私が残念ながら、標準語があんまりよく喋れませんが、多分がんばったら、一分ぐらいは続くんじゃないかと思いますが、それ以上もたない。ただ、外国の方と初対面の時は、なるべくおおきにかか、かんにんとかいう言葉は使わずに、有難うとか、そういう風に言うように努力をしていたのですが、今までのみなさんの話を聞いて、そういう努力はする必要はない。「おおきに」「かんにん」、でええやないかと言うて頂いたような気がします。勇気づけられました。有難うございました。みなさんも長時間、有難うございました。

○司会：千田 締めくくりのご挨拶をしたいと思います、たいへんおもしろかつ

たと思います。最初、『外からのまなざし』というのは、どうなることかと思いましたが、今から考えますと、様々なまなざしというタイトルの方がよかったです。はないかという、これ私反省をしております。しかし大成功だったと思います。で、日文研も一〇周年を迎えまして、本来ならば、日文研、外からのまなざしという風なディスカッションの方がよかったですのではないかと思います。それ程、日文研は外のまなざしを気にするようになって来たわけです。それは一つの成長かもしれません。日文研フォーラムというのはこれからも継続して行きたいと思えますから、どうぞ、日文研フォーラムに目をそらさないように、眼がを付けて頂きたいと思います。今日は、パネラーの先生方、それから、コーディネーター、コメンテーターの先生方、どうも有難うございました。会場の皆さん、盛大な拍手をお願い致します。どうも、有難うございました。

日文研フォーラム開催一覧

回	年月日	発表者・テーマ
1	62.10.12 (1987)	アレッサンドロ・バロータ (ピサ大学助教授) Alessandro VALOTA 「近代日本の社会移動に関する一、二の考察」
2	62.12.11 (1987)	エンゲルベルト・ヨリッセン (日文研客員助教授) Engelbert JORIßEN 「南蛮時代の文書の成立と南蛮学の発展」
③	63. 2.19 (1988)	リー A. トンプソン (大阪大学助手) Lee A. THOMPSON 「大相撲の近代化」
4	63. 4.19 (1988)	フォスコ・マライーニ (日文研客員教授) Fosco MARAINI 「庭園に見る東西文明のちがひ」
⑤	63. 6.14 (1988)	宋 彙七 (慶北大学校師範大学副教授) SONG Whi Chil 「大塩平八郎研究の問題点」
6	63. 8. 9 (1988)	セップ・リンハルト (ウィーン大学教授) Sepp LINHART 「近世後期日本の遊び—拳を中心に—」
⑦	63.10.11 (1988)	スーザン J. ネイピア (テキサス大学助教授) Susan NAPIER 「近代日本小説における女性像—現実と幻想—」
⑧	63.12.13 (1988)	ジェームズ C. ドビンス (オベリン大学助教授) James C. DOBBINS 「仏教に生きた中世の女性—恵信尼の書簡—」

⑨	元. 2.14 (1989)	嚴 安生 (北京外国語学院日本語学部助教授) YAN An Sheng 「中国人留学生の見た明治日本」
⑩	元. 4.11 (1989)	劉 敬文 (遼寧大学日本研究所副所長) LIU Jingwen 「教育投資と日本の戦後経済高度成長」
⑪	元. 5. 9 (1989)	スザンヌ・ゲイ (オベリン大学助教授) Suzanne GAY 「中世京都における土倉酒屋－都市社会の自由とその限界－」
⑫	元. 6.13 (1989)	夏 剛 (京都工芸繊維大学助教授) HSIA Gang 「インタビュー・ノンフィクションの可能性－猪瀬直樹著『日本凡人伝』を手掛りに－」
⑬	元. 7.11 (1989)	エルンスト・ロコバント (東洋大学助教授) Ernst LOKOWANDT 「国家神道を考える」
⑭	元. 8. 8 (1989)	キム・レーホ (ソ連科学アカデミー・世界文学研究所教授) KIM Rekho 「近代日本文学研究の問題点」
⑮	元. 9.12 (1989)	ハルトムートO. ローターモンド (フランス国立高等研究院教授) Hartmut O. ROTERMUND 「江戸末期における疱瘡神と疱瘡絵の諸問題」
⑯	元.10. 3 (1989)	汪 向榮 (中国中日関係史研究会常務理事・日文研客員教授) WANG Xiang-rong 「弥生時期日本に来た中国人」
⑰	元.11.14 (1989)	ジェフリー・ブロードベント (ミネソタ大学助教授) Jeffrey BROADBENT 「地域開発政策決定過程を通して見た日米社会構造の比較」

⑱	元.12.12 (1989)	エリック・セズレ (フランス国立科学研究所助教授) Eric SEIZELET 「日本の国際化の展望と外国人労働者問題」
⑲	2. 1. 9 (1990)	スミエ・ジョーンズ (インディアナ大学準教授) Sumie JONES 「レトリックとしての江戸」
⑳	2. 2.13 (1990)	カール・ベッカー (筑波大学哲学思想学系外国人教師) Carl BECKER 「往生－日本の来生観と尊厳死の倫理」
㉑	2. 4.10 (1990)	グラント K. グッドマン (カンザス大学教授・日文研客員教授) Grant K. GOODMAN 「忘れられた兵士－戦争中の日本に於けるインド留学生」
22	2. 5. 8 (1990)	イアン・ヒデオ・リービ (スタンフォード大学準教授・日文研客員助教授) Ian Hideo LEVY 「柿本人麿と日本文学における『独創性』について」
23	2. 6.12 (1990)	リヴィア・モネ (ミネソタ州立大学助教授) Livia MONNET 「村上春樹：神話の解体」
㉒	2. 7.10 (1990)	李 国棟 (北京連合大学外国語師範学院日本語学部講師) LI Guodong 「魯迅の悲劇と漱石の悲劇－文化伝統からの一考察－」
㉓	2. 9.11 (1990)	馬 興国 (遼寧大学日本研究所副所長・日文研客員助教授) MA Xing-guo 「正月の風俗－中国と日本」
㉔	2.10. 9 (1990)	ケネス・クラフト (リーハイ大学助教授) Kenneth KRAFT 「現代日本における仏教と社会活動」

27	2.11.13 (1990)	アハマド M. ファトヒ (カイロ大学講師) Ahmed M. FATTHY 「義経文学とエジプトのベールス王伝説における主従関係の比較」
②⑧	3. 1. 8 (1991)	カレル・フィアラ (カレル大学日本学科長・日文研客員助教授) Karel FIALA 「言語学からみた『平家物語・巻一』の成立過程」
②⑨	3. 2.12 (1991)	アレクサンドル A. ドーリン (ソ連科学アカデミー東洋学研究所上級研究員) Aleksandr A. DOLIN 「ソビエットの日本文学翻訳事情－古典から近代まで－」
30	3. 3. 5 (1991)	ウイーベ P. カウテルト (ワーゲニンゲン大学研究員) Wybe P. KUITERT 「バロック・ヨーロッパの日本庭園情報 －ゲオルグ・マイステルの旅－」
③①	3. 4. 9 (1991)	ミコワイ・メラノヴィッチ (ワルシャワ大学教授・日文研客員教授) Mikołaj MELANOWICZ 「ポーランドにおける谷崎潤一郎文学」
32	3. 5.14 (1991)	ベアトリス M. ボダルト・ベイリー (オーストラリア国立 大学リサーチフェロー・日文研客員助教授) Beatrice M. BODART-BAILEY 「三百年前の京都－ケンペルの上洛記録」
③③	3. 6.11 (1991)	サトヤ B. ワルマ (ジャワハルラル・ネール大学教授・日文研客員教授) Satya. B. VERMA 「インドにおける俳句」
34	3. 7. 9 (1991)	ユルゲン・ベルント (フンボルト大学教授・日文研客員教授) Jürgen BERNDT 「ドイツ統合とベルリンにおける森鷗外記念館」

③⑤	3. 9.10 (1991)	ドナルド M. シーキンス (琉球大学助教授) Donald M. SEEKINS 「忘れられたアジアの片隅－50年間の日本とビルマの関係」
③⑥	3.10. 8 (1991)	王 曉平 (天津師範大学助教授・日文研客員助教授) WANG Xiao Ping 「中国詩歌における日本人のイメージ」
③⑦	3.11.12 (1991)	辛 容泰 (東国大学校文科大学教授・日文研来訪研究員) SHIN Yong-tae 「日本語の起源 －日本語・韓国語・甲骨文字との脈絡を探る－」
③⑧	3.12.10 (1991)	洪 潤植 (東国大学校教授) HONG Yoon Sik 「古代日本佛教における韓国佛教の役割」
③⑨	4. 1.14 (1992)	サウィトリ・ウィシュワナタン (デリー大学教授・日文研客員教授) Savitri VISHWANATHAN 「インドは日本から遠い国か？－第二次大戦後の 国際情勢と日本のインド観の変遷－」
40	4. 3.10 (1992)	ジャン = ジャック・オリガス (フランス国立東洋言語文化研究所教授) Jean-Jacques ORIGAS 「正岡子規と明治の随筆」
④①	4. 4.14 (1992)	リブシェ・ボハーチコヴァー (プラハ国立博物館日本美術 元キュレーター・日文研客員教授) Libuše BOHÁČKOVÁ 「チェコスロバキアにおける日本美術」
42	4. 5.12 (1992)	ポール・マッカーシー (駿河台大学教授) Paul McCARTHY 「谷崎文学の『読み』と翻訳：アメリカにおける 最近の傾向」

43	4. 6. 9 (1992)	G. カメロン・ハーストⅢ (ニューヨーク市立大学リーマン 広島校学長・カンザス大学東アジア研究所長) G. Cameron HURST Ⅲ 「兵法から武芸へー徳川時代における武芸の発達ー」
44	4. 7.14 (1992)	杉本 良夫 (オーストラリア・ラトロブ大学教授) Yoshio SUGIMOTO 「オーストラリアから見た日本社会」
④5	4. 9. 8 (1992)	王 勇 (杭州大学日本文化研究センター教授・日文研 客員助教授) WANG Yong 「中国における聖徳太子」
④6	4.10.13 (1992)	李 栄九 (大韓民国中央大学教授・日文研客員教授) LEE Young Gu 「直観と芭蕉の俳句」
④7	4.11.10 (1992)	ウィリアム D. ジョンストン (米国・ウェスリアン大学助教授・日文研客員助教授) William D. JOHNSTON 「日本疾病史考 - 『黴毒』 の医学的・文化的概念の形成」
④8	4.12. 8 (1992)	マノジュ L. シュレスト (甲南大学経営学部講師) Manoj L. SHRESTHA 「アジアにおける日系企業の戦略転換 ー技術移転をめぐるー」
④9	5. 1.12 (1993)	朴 正義 (圓光大学校師範大学副教授・日文研来訪研究員) PARK Jung-Wei 「キリスト教受容における日韓比較」
50	5. 2. 9 (1993)	マーティン・コルカット (米国・プリンストン大学教授・日文研客員教授) Martin COLLCUTT 「伝説と歴史の間ー北條政子と宗教」

⑤1	5. 3. 9 (1993)	清水 義明 (米国・プリンストン大学マーカンド荣誉教授) Yoshiaki SHIMIZU 「チャールズ L. フリアー (1854~1919) とフリアー美術館 -米国の日本美術コレクションの一例として-
⑤2	5. 4.13 (1993)	金 春美 (高麗大学教授・日文研来訪研究員) KIM Choon Mie 「日本近代知識人の思想と実践-有島武郎の場合-
53	5. 5. 11 (1993)	タキエ・スギヤマ・リブラ (ハワイ大学教授) Takie SUGIYAMA LEBRA 「皇太子妃選択の象徴性 -旧身分文化との関連を中心として-
54	5. 6. 8 (1993)	姜 希雄 (ハワイ大学教授・日文研客員教授) H.W.KANG 「変革と選択 : 10世紀の日本と朝鮮 -科挙制度をめぐって-
⑤5	5. 7.13 (1993)	ツベタナ・クリステワ (ソフィア大学教授・日文研客員教授) Tzvetana KRISTEVA 「涙の語り - 平安朝文学の特質 -」
⑤6	5. 9.14 (1993)	金 容雲 (漢陽大学教授・日文研客員教授) KIM Yong-Woon 「和算と韓算を通してみた日韓文化比較」
⑤7	5.10.12 (1993)	オロフ G. リディン (コペンハーゲン大学教授・日文研客員教授) Olof G. LIDIN 「徳川時代思想における荻生徂徠」
⑤8	5.11. 9 (1993)	マヤ・ミルシンスキー (スロベニア・リュブリアナ大学助教授・日文研客員助教授) Maja MILČINSKI 「無常観の東西比較」

59	5.12.14 (1993)	ウィリー・ヴァンドゥワラ (ベルギー・ルーヴァン・カトリック大学教授・日文研客員教授) Willy VANDE WALLE 「日本・ベルギー文化交流史 -南蛮美術から洋学まで-」
60	6. 1.18 (1994)	J. マーティン・ホルマン (ミシガン州立大学連合日本センター所長) J. Martin HOLMAN 「自然と為作 -井上靖文学における『陰謀』 -」
61	6. 2. 8 (1994)	マイヤ・ゲラシモワ (ロシア科学アカデミー東洋学研究所研究員) Maya GERASIMOVA 「外から見た日本文化と日本文学 -俳句の可能性を中心に-」
62	6. 3. 8 (1994)	オギュスタン・ベルク (フランス・社会科学高等研究院教授・日文研客員教授) Augustin BERQUE 「和辻哲郎の風土論の現代性」
63	6. 4.12 (1994)	リチャード・トランス (オハイオ州立大学助教授) Richard TORRANCE 「出雲地方に於ける読み書き能力と現代文学、1880～1930」
64	6. 5.10 (1994)	シルバーノ D. マヒウォ (フィリピン大学アジア・センター準教授) Sylvano D. MAHIWO 「フィリピンにおける日本現状紹介の諸問題」
65	6. 6.10 (1994)	劉 建輝 (中国・南開大学副教授・日文研客員助教授) LIU Jian Hui 「『魔都』体験-文学における日本人と上海」
66	6. 7.12 (1994)	チャールズ J. クイン (オハイオ州立大学準教授・東北大学客員教授) Charles J. QUINN 「私の日本語発見-王朝文を中心に-」

67	6. 9.13 (1994)	フランソワ・マセ (フランス国立東洋言語文化研究所教授・日文研客員教授) François MACÉ 「幻の行列－秀吉の葬送儀礼－」
⑥8	6.11.15 (1994)	賈 蕙萱 (北京大学助教授・日文研客員助教授) JIA Hui-xuan 「中日比較食文化論－健康的飲食法の研究－」
69	6.12.20 (1994)	彭 飛 (日本学術振興会特別研究員) PENG Fei 「日本語の表現からみた－異文化摩擦のメカニズム－」
⑦0	7. 1.10 (1995)	ミハイル・ウスペンスキー (エルミタージュ美術館学芸員・日文研客員助教授) Michail V. USPENSKY 「根付－ロシア・エルミタージュ美術館のコレクションを中心－」
⑦1	7. 2.14 (1995)	嚴 紹盪 (北京大学教授・日文研客員教授) YAN Shao Dang 「記紀神話における二神創世の形態－東アジア文化とのかかわり－」
⑦2	7. 3.14 (1995)	王 家驊 (中国・南開大学教授・日文研客員教授) WANG Jiahua 「渋沢栄一の『論語算盤説』と日本的な資本主義精神」
⑦3	7. 4.11 (1995)	アリソン・トキタ (オーストラリア・モナシュ大学助教授・日文研客員助教授) Alison TOKITA 「日本伝統音楽における語り物の系譜－旋律型を中心－」

⑦④	7. 5. 9 (1995)	リュドミーラ・エルマコーワ (ロシア科学アカデミー東洋学研究所極東文学課長) Lioudmila ERMAKOVA 「和歌の起源－神話と歴史－」
75	7. 6. 6 (1995)	パトリシア・フィスター (日文研客員助教授) Patricia FISTER 「近世日本の女性画家たち－」
76	7. 7.25 (1995)	崔 吉城 (広島大学総合科学部教授) CHOI Kil-Sug 「『恨』の日韓比較の一考察」
⑦⑦	7. 9.26 (1995)	蘇 徳昌 (奈良大学教養部教授) SU Dechang 「日中の敬語表現」
⑦⑧	7.10.17 (1995)	李 均洋 (西北大学副教授・日文研来訪研究員) LI Jun Yang 「一日・中比較文化考－雷神思想の源流と展開」
79	7.11.28 (1995)	ウィリアム・サモニデス (カンザス大学助教授・日文研客員助教授) William SAMONIDES 「豊臣秀吉と高台寺の美術」
⑧①	7.12.19 (1995)	タチャーナ L. ソコロワ＝デリュージナ (翻訳家・日文研来訪研究員) Tatyana L. SOKOLOVA-DELYUSINA 「俳句の国際性－西欧の俳句についての一考察－」
81	8. 1.16 (1996)	ジョン・クラーク (シドニー大学助教授・日文研客員助教授) John CLARK 「日本の近代性とアジア：絵画の場合」

⑧2	8. 2.13 (1996)	ジェイ・ルービン (ハーバード大学教授・日文研客員教授) Jay RUBIN 「京の雪、能の雪」
83	8. 3.12 (1996)	イザベル・シャリエ (神戸大学国際文化学部外国人教師) Isabelle CHARRIER 「日本近代美術史の成立 - 近代批評における新語 -」
⑧4	8. 4.16 (1996)	リース・モートン (ニューキャッスル大学教授・日文研客員教授) Leith MORTON 「日本近代文芸におけるゴシック風小説」
⑧5	8. 5.28 (1996)	マーク・コウディ・ポールトン (ヴィクトリア大学助教授・日文研客員助教授) Mark Cody POULTON 「能における『草木成仏』の意味」
⑧6	8. 6.11 (1996)	フランシスコ・ハビエル・タブレロ (慶應義塾大学訪問講師) Francisco Javier TABLERO 「社会的構築物としての相撲」
87	8. 7.30 (1996)	シルヴァン・ギニヤール (大阪学院大学助教授) Sylvain GUIGNARD 「筑前琵琶 - 文化を語る楽器」
88	8. 9.10 (1996)	ハーバート E. プルチョウ (カリフォルニア大学ロサンゼルス校教授・日文研客員教授) Herbert E. PLUTSCHOW 「怨霊の領域」
⑧9	8.10. 1 (1996)	王 秀文 (中国・東北民族学院助教授・日文研客員助教授) WANG Xiu-wen 「シャクシ・女・魂 - 日本におけるシャクシにまつわる民間信仰 -」

90	8.11.26 (1996)	王 宝平 (中国・杭州大学日本文化研究所副所長・ 日文研客員助教授) WANG Bao Ping 「明治前記に來日した中国人の外交官たちと日本」
⑨1	8.12.17 (1996)	陳 生保 (中国・上海外国語大学教授・日文研客員教授) CHEN Shen Bao 「中国語の中の日本語」
⑨2	9. 1.21 (1997)	アレキサンダー N. メシェリャコフ (ロシア科学アカデミー東洋学研究所教授・日文研來訪 研究員) Alexander N. MESHCHERYAKOV 「奈良時代の文化と情報」
93	9. 2.18 (1997)	郭 永喆 (韓国・漢陽大学文科大学長・日文研客員教授) KWAK Young-Cheol 「言語から見た日本」
94	9. 3.18 (1997)	マリア・ロドリゲス・デル・アリサル (スペイン・マドリード 国立外国語学校助教授・日本学研究所所長) Maria RODRIGUEZ DEL ALISAL 「弁当と日本文化」
⑨5	9. 4.15 (1997)	ミケーレ・マルラ (カリフォルニア大学ロサンゼルス校 準教授・日文研客員助教授) Michele F. MARRA 「弱き思惟 - 解釈学の未来を見ながら」
⑨6	9. 5.13 (1997)	デニス・ヒロタ (京都浄土真宗翻訳シリーズ主任翻訳家 バークレー仏教研究所準教授) Dennis HIROTA 「日本浄土思想と言葉 - なぜ一遍が和歌を作って、親鸞が作らなかったか」
⑨7	9. 6.10 (1997)	ヤン・シコラ (チェコ・カレル大学助教授・日文研客員助教授) Jan SYKORA 「近世商人の世界 - 三井高房『町人考見録』を中心に -」

98	9. 7. 8 (1997)	鶴田 欣也 (カナダ・ブリティッシュコロンビア大学教授・ 日文研客員教授) Kinya TSURUTA 「向こう側の文学—近代からの再生—」
99	9. 9. 9 (1997)	ポーリン ケント (龍谷大学助教授) Pauline KENT 「『菊と刀』のうら話」
100	9.10.14 (1997)	セオドア ウィリアム グーセン (カナダ・ヨーク大学準教授・日文研客員助教授) Theodore William GOOSSEN 「『日本文学』とは何か—21世紀に向かって」
⑩1	9.11.11 (1997)	金 禹昌 KIM Uchang (韓国・高麗大学校文科大学教授・日文研客員教授) リヴィア モネ Livia MONNET (スイス・モントリオール大学準教授・日文研来訪研究員) カール モスク Carl MOSK (アメリカ・ヴィクトリア大学教授・日文研客員教授) ヤン シコラ Jan SYKORA (チェコ・カレル大学助教授・日文研客員助教授) 鶴田 欣也 Kinya TSURUTA (カナダ・ブリティッシュ コロンビア大学教授・日文研客員教授) パネルディスカッション 「日本および日本人—外からのまなざし」
102	9.12. 9 (1997)	ジョナ サルズ (龍谷大学助教授) Jonah SALZ 「猿から尼まで—狂言役者の修行」
103	10. 1.13 (1998)	姜 信杓 (韓国・仁済大学校人文社会科学研究所助教授) KANG Shin-pyo 「京都考見録：韓国文化人類学者の経験」
104	10. 2.10 (1998)	高 文漢 (中国・山東大学教授・日文研客員教授) GAO Wenhan 「中世禪林の異端者—一休宗純とその文学」

105	10. 3. 3 (1998)	シュテファン カイザー (筑波大学教授) Stefan KAISER 「和魂漢才、和魂洋才ー語彙・表記に見る日本文化の特性」
-----	--------------------	--

○は報告書既刊

発行日 1998年3月31日
編集発行 国際日本文化研究センター
京都市西京区御陵大枝山町3-2
電話 (075) 335-2048

問合せ先 国際日本文化研究センター
管理部・研究協力課

1998 国際日本文化研究センター

■ 日時

1997年 11 月 11 日(火)

午後1時 30 分～ 4時

■ 場所

国際日本文化研究センター

日文研ホール